



令和5年度指定  
スーパーサイエンスハイスクール  
研究開発実施報告書・第3年次



令和8年3月

島根県立出雲高等学校

## 巻 頭 言

島根県立出雲高等学校は平成25年度のSSH指定から13年目を迎え、研究分野で活躍する卒業生を輩出するなど、本取組の成果と有用性は着実に実を結んできています。現在は第Ⅲ期として、第Ⅱ期をさらに充実させた「国創りを牽引するイノベーション人財を育てる教育プログラムの研究開発Ⅱ」を推進中です。本研究では、デザイン思考に基づく科学的探究力を備えた人財育成を継続し、全校生徒（理数科・普通科）を対象に教育プログラムを開発・実施しています。課題発見力の向上、科学技術と社会課題を統合した価値創造力の育成、および客観的根拠に基づき論理的に思考・表現する力の定着を重視し、あらゆる教育活動を通じ、多角的・多面的な視点を持って未来を切り拓く資質・能力の育成を目指しています。

具体的な取組として本校独自の学校設定科目「Basic Science」では、第Ⅲ期よりデータサイエンスを基軸とした教育を深化させています。今年度は、これまでの島根大学との連携実績を踏まえ、本校教員が自ら開発したオリジナル教材による授業を実践しました。令和5年度から2年間、島根大学数理・データサイエンス教育研究センターとの連携した授業を実施し、大学教員から専門的なデータサイエンスについて学習することで、統計学に関する生徒の理解が深まり、データサイエンスリテラシーや科学的リテラシーの習得が一歩進みました。また、授業担当者の情報教員の指導力向上にもつながり、その結果として本校独自のオリジナル教材を作成するに至りました。近日中に本校のホームページに公開する予定ですのでご覧いただきご忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

さらに、第Ⅲ期では教科学習と課題研究の好循環を生み出すことを目的に「授業のSS化」を掲げた授業改善を全校体制で推進しています。今年度はこの「授業のSS化」をより進化させて「主体性・課題発見力の育成」「授業での学びと家庭学習の連携」「課題研究と教科学習の好循環」のいずれかを重点テーマに据えた「“出雲流”授業力向上」として全校体制で授業改善に取り組みました。具体的な推進にあたっては、校内にプロジェクトチームを組織し、全教員が参加するミニ研修会や、校外へも授業を公開する「授業力向上DAYs」を実施しました。これらの継続的な取組の結果、生徒の学習姿勢に確かな成果が現れています。授業アンケートでは、全学年で肯定的な回答値が上昇しており、生徒からは「自分で考える時間が確保されている」「すぐ答えを言われぬのがよい」といった、教員が「待つ」姿勢を貫く授業スタイルへの高い評価が寄せられています。また、対話的な学びを通じて「自分の理解が浅いことに気づいた」といったメタ認知能力の向上や、根拠を明確にして意見を伝える姿勢の定着も確認されました。一方で、高度なアウトプットに対する生徒の自信の不足や、自ら問いを生み出す「課題発見力」のさらなる強化といった課題も明確になっています。今後は、本校独自の指導改善PDSAサイクルをより着実に回し、公開授業といった特別な機会だけでなく、日々の授業場面において生徒が自ら問いを解決し、さらなる探究心へとつなげていく「学びのスタイル」の深化を目指してまいります。

これまでの成果を基盤に、組織的な指導体制の確立と教科間連携の深化を図り、研究開発をさらに加速させてまいります。また、島根県および山陰両県における科学技術人材育成の牽引役として、探究データベース「叢雲」をプラットフォームとした広域的な連携の強化を目指してまいります。国内外の教育・研究機関、さらには卒業生との強固なネットワークを構築し、地域と世界を繋ぐ「探究の拠点校」としての役割を果たすべく、本事業を推進いたします。

最後になりますが、本校SSH事業の推進にご支援をいただいている文部科学省、国立研究開発法人科学技術振興機構、管理機関である島根県教育委員会、島根大学、島根県立大学などの大学関係者、出雲市役所、出雲市教育委員会、出雲科学館、出雲村田製作所など地元の行政、社会教育施設、企業や各種団体、また本校と交流いただいている国内外の中学校・高等学校、そして運営指導委員の皆様など、関わってくださっているすべての方々へ心よりお礼申し上げます。また本報告書をお読みいただいた皆様には、忌憚のないご意見ご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

島根県立出雲高等学校 校長 小林 努

## 目 次

①	令和7年度SSH研究開発実施報告（要約）：別紙様式1	・・・1
②	関係資料	・・・11～
	資料1 令和7年度教育課程表	・・・11
	資料2 各種分析基礎資料	・・・12
	資料3 運営指導委員会の記録	・・・26
	資料4 生徒研究テーマ一覧	・・・27
	資料5 評価表	・・・28
	資料6 用語解説	・・・29

島根県立出雲高等学校	基礎枠 (または文理融合基礎枠)
指定第Ⅲ期目	05～09

①令和7年度スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告（要約）

① 研究開発課題											
国創りを牽引するイノベーション人材を育てる教育プログラムの研究開発Ⅱ											
② 研究開発の概要											
<p>第Ⅱ期における本校独自の課題研究プログラム（「デザインズ」とよぶ）に新たな視点を加え、情報活用力・課題発見力育成を特に強化した「シン・デザインズ※」を開発する。</p> <p>また、授業改善による教科学習との好循環による相互の深化を図るとともに、全校指導体制を更に進化させた「シン・出雲モデル」を構築して支援する。</p> <p>さらに、地域との連携・協働による科学教育の連続性を担保する仕組み及び土壌を作り上げ、イノベーション人材、トップサイエンティスト育成を強力に推進する。</p> <p>※「デザイン思考」を基にした本校独自の課題研究プロセスのこと</p>											
③ 令和7年度実施規模											
課程（全日制）											
学 科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計		実施規模
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	
普通科	241	6	233	6	236	6	-	-	710	18	全校生徒を対象に実施
理系	-	-	<u>114</u>	<u>3</u>	<u>116</u>	<u>3</u>	-	-	<u>230</u>	<u>6</u>	
文系	-	-	<u>119</u>	<u>3</u>	<u>120</u>	<u>3</u>	-	-	<u>239</u>	<u>6</u>	
理数科	29	1	39	1	38	1	-	-	106	3	
課程ごとの計	270	7	272	7	274	7	-	-	816	21	
④ 研究開発の内容											
○研究開発計画											
【第1年次（令和5年度）】											
1. 第Ⅲ期SSHの柱となる、課題研究プログラム「シン・デザインズ」の基礎を支える学校設定科目「Basic Science」で実施するデータサイエンスの具体的な実践方法の研究・開発に重点的に取り組む。											
2. SS探究基礎で実施する課題発見プログラムの開発と、データサイエンスとの連動を意識した教材開発を行う。また出雲科学館と連携して小中学生との交流・研究を推進する。											
3. 卒業生による「出雲じんざいネットワーク」の構築を進める。											
4. 授業改善を全教科に広め、公開授業を行う。											
【第2年次（令和6年度）】											
1. 大学等の研究機関や企業、「出雲じんざいネットワーク」等との連携を拡大。											
2. 山陰探究データベース「叢雲（むらくも）」を活用しながら学校間連携を図る。											
3. 第1学年で習得した内容により第2学年が実施する「SS探究発展A・B」における課題研究・探究活動をより実践的・共創的に深化させる。											

【第3年次（令和7年度）】

3年間の活動カリキュラム完成年度として、成果と課題を明らかにし研究課題の達成状況を検証する。

【第4年次（令和8年度）】

S S H中間評価での指摘事項を踏まえ、各取組の充実と改善を行う。

【第5年次（令和9年度）】

1. S S H第Ⅲ期目の総括を行い、研究成果を広く公開し、積極的に普及活動を行う。
2. 研究指定終了後も実践できる持続可能な教育システムとして活用できるよう、各プログラムのさらなる充実を目指す。

○教育課程上の特例

学科・コース	開設する 教科・科目等		代替される 教科・科目等		対 象
	教科・科目名	単位数	教科・科目名	単位数	
理数科 普通科	SS・SS探究基礎	1	総合的な探究の時間	1	第1学年
理数科 普通科	SS・Basic Science	1	情報・情報 I	1	第1学年
理数科	SS・SS探究発展B	3	総合的な探究の時間 (理数・理数探究 2)	2	第2・3学年
			情報・情報 I	1	
普通科	SS・SS探究発展A	3	総合的な探究の時間	2	第2・3学年
			情報・情報 I	1	

○令和7年度の教育課程の内容のうち特徴的な事項

学科・コース	第1学年		第2学年		第3学年		対 象
	教科・科目名	単位数	教科・科目名	単位数	教科・科目名	単位数	
理数科	SS・ SS探究 基礎	1	SS・ SS探究 発展B	2	SS・ SS探究 発展B	1	理数科 全員
普通科 (文系理 系共通)			SS・ SS探究 発展A		SS・ SS探究 発展A		

○具体的な研究事項・活動内容

○研究開発の内容

1) 学校設定科目による特色ある取組

・学校設定科目「Basic Science」

データサイエンスを基軸として、「数学」・「情報」・「理科」・「地歴公民」等の教科間連携を見据え、次代を担う人材に不可欠である、データサイエンスリテラシーおよび科学的リテラシーを習得する。

実施内容	詳細
情報検索演習	検索方法（検索キーワードや閲覧するサイト）を工夫して、インターネットで情報を収集し、収集した情報の中身を検討する。

情報リテラシー	情報モラルと個人に及ぼす影響、知的財産権、個人情報保護と管理、情報セキュリティ、研究倫理
データサイエンス	標本、ランダム、抽出（サンプリング）、平均値、中央値、最頻値、分散、標準偏差、偏差値、表計算、データの可視化、正規分布、データ分析（クロス集計、相関、回帰）
プログラミング	インプット、アルゴリズムとフローチャート、プログラミング演習、乱数とその活用、探索アルゴリズム、ソートアルゴリズム、モデル化とシミュレーション

令和5、6年度には島根大学数理・データサイエンス教育研究センターと連携し、オリジナル教材及び動画コンテンツを利用しながら離れた場所にいる大学教員と本校情報担当教員の指導の下でレポートを作成・提出するといったオンデマンド型連携授業を実践した。これを踏まえて令和7年度は本校の教員がオリジナルの教材を作成し、授業を実践した。授業の下半期にはプログラミング演習を行い、プログラミング的思考と具体的なプログラムの作成を習得した。研究倫理演習では、eラーニングにより、研究を進めるうえで遵守すべき内容を学習した。また、プロフェッショナルセミナーとして、地元企業・大学等研究者（技術者）による体験的な学習セミナーや、研究の具体についてのセミナーを実施し、進路意識の醸成につなげた。

・学校設定科目「SS探究基礎」

取組内容	
情報整序演習	KJ法やウェビング法を用いた情報整序を通し、論理的な思考力及び客観的根拠に基づく思考力を育成する。
課題発見プログラム	フレームワーク演習や身近な問題をデータベースに蓄積しながら問題を可視化して洞察するプログラムを通して課題発見力を育成する。
課題研究基礎	日常生活に関連する探究テーマについて、共通の課題を準備、課題研究の流れを理解する。設定された課題についてその背景・特徴や課題に対する調査を行い、課題の解決策を考察する。調査・研究の成果をポスターにまとめ、他者に分かりやすく発表する。
プレゼンテーション演習	模範的プレゼンテーションを参考にした、効果的な発表姿勢・技能について考察し習得する。

「AI普及の利点と問題点」、「キャッシュレス決済の利点と問題点」、「eスポーツの利点と問題点」、「オールドメディアの利点と問題点」の与えられたテーマに対してKJ法・ウェビング法を用いた情報整序演習を行った。また、課題研究プログラムでは、写真素材（積の順序論争、問題を解くアプリ（思考力低下）、人種・女性差別などを含む8種類）や新聞記事を活用して課題を見つけ出す「なぜ？」を強化し、課題を発見する力を育成する学習を行った。授業の下半期では課題研究基礎として協働的な力とトライアンドエラーの重要性に気付かせる共通テーマ「出雲高校×〇〇」として3月にクラス内ですべての班がポスター発表を行った。クラス内の発表会へ先駆けて2年生の研究発表を参観させることにより発表のやり方等を学習させた。発表会後はプレゼン演習と2年次の課題研究を円滑に開始するため、Discover Insight Memoを活用して、課題研究テーマの材料を集める。

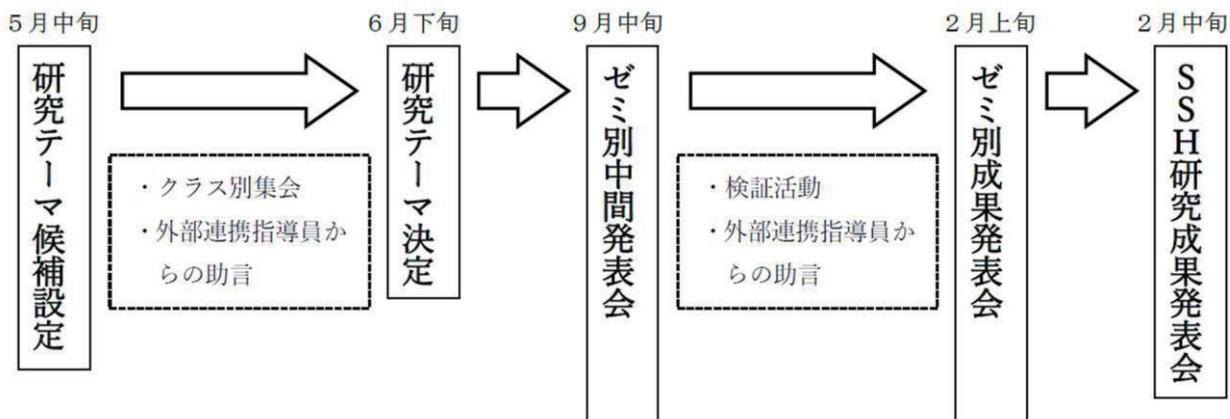
・学校設定科目「SS探究発展A・B」

「SS探究発展A」（2年普通科）

各大学および外部機関に指導協力頂ける研究領域に関するゼミ（分野）に分かれて4～5人一組のグループ研究活動を進める。課題設定では「シン・デザインズ」（デザインズについては p.29 用語解説参照）に基づき、解決すべき課題の可視化を促す。ゼミ（分野）の配属は生徒の希望を参

考に割り振りし、ゼミ（分野）には出雲高校のアドバイザー教員が付いて指導するとともに、各大学および外部機関の指導協力教員の助言を得ながら専門性を深める（本校の課題研究の指導体制については、p.29に掲載）。各班の研究タイトルは p.27 に掲載している。

<年間スケジュール>



### 「SS探究発展B」（2年理数科）

研究分野は、数学、物理、化学、生物、地学の5分野を設定し、生徒に希望調査を行った上で一つの研究班を最大で5人構成とし、数学（1）物理（2）化学（2）生物（2）地学（1）の計8班に分けた。テーマ設定においては、生徒たちが班ごとに協議し、自分たちが解決したいことや疑問点、興味があることは何かを話し合い、自分たちでテーマを作り出し設定するという形態にしている。また、研究班ごとに校内の理科・数学の教員を配置し、本校教員が分野ごとの内容説明や研究テーマ例を提示しながら、テーマの設定段階から継続的に関わっている。また、課題研究の進捗管理、研究活動の指導・評価などを行っている。連携する大学教員には研究仮説検証方法の模索段階での助言や中間発表会、成果発表会など経過ごとの助言という側面的な支援を依頼した。

週2時間の研究活動は、各班に分かれて校内指導教員の指導・監督のもと実験・観察活動を行った。

シンガポール海外研修における英語発表に際して、研究の英訳に不安を感じる生徒もいるため、島根大学に英語発表に関する講演会を実施してもらった。1月の出発前には英語の教員とALTによる英語での発表練習会を実施し、現地では英語による発表とディスカッションを行った。

課題研究の年間のスケジュールはほぼ普通科と同じである。各班の研究タイトルは p.27 に掲載している。

### 「SS探究発展A・B」（3年普通科・理数科）

2年次に研究した成果を改良し、研究機関や地域に対して研究の内容を発表した。

発表会の名称	内容
キッズのためのスーパーサイエンス	理数科・普通科生徒が本校オープンスクールに参加した中学生を対象に研究内容をポスター発表した。
島根大学グローバルセッション	普通科文系生徒が島根大学に訪問して、大学の教員に英語で発表し、英語でディスカッションを行った。
地域創生に向けた高校生からの提案	市役所に向けて地域課題や社会課題を科学的側面から研究した内容を提案形式で発表した。
山陰探究サミット	本校主催により、山陰両県のSSH校、探究学習推進校等7校（松江南高校、松江東高校、益田高校、鳥取県立鳥取西高校、鳥取県立米子東高校、広島県立大崎海星高校、本校）による合同発表会を実施した。

・関西先端科学研修（1年理数科・普通科全員）

関西方面の研究機関や大学、民間企業等を訪問し、科学的リテラシーの向上とともに学習への主体性や進路意識を高めた。

<訪問先一覧>

立命館大学経済学部	国立民族学博物館	大阪大学感染症総合教育研究拠点
大阪公立大学法学部	大阪司法書士会	奈良県立橿原考古学研究所
大阪大学大学院文学研究科	公益財団法人 地球環境産業技術研究機構（RITE）	神戸大学医学部附属病院 感染症内科
理化学研究所播磨 放射光科学総合研究センター（SPRING-8）	理化学研究所 生命機能科学研究センター	京都大学大学院理学研究科附属天文台（花山天文台）
京都大学防災研究所	京セラ株式会社	京都大学大学院工学研究科物質エネルギー化学専攻
京都大学生態学研究センター	オムロン株式会社 京阪奈イノベーションセンター	

2) 科学観の充実

・サイエンスチャンネル

生徒会や部活動による、校外機関との連携による共同研究を目指した双方向の広報活動である。SSHの取組や各発表会等の行事を新聞部が取財し、その内容を記事にして全校生徒と共有した。

3) トップサイエンティストの養成

・サイエンスリーダー養成事業

独創的な生徒個人研究の支援、ホンモノの研究を集中的に実習する派遣プログラムを実施した。希望者を募って夏に東京科学大学、冬に京都大学・大阪大学の研究室を訪問し、1泊2日で研究体験を行った。

・島根大学科学研修

理数科1年生を対象とし、島根大学医学部と連携した生命科学や理工学に関する先端研究内容に関する講義・実習を行った（午前：産学連携・地域連携の講義・実習、午後：基礎系の講義、臨床シミュレーター実習、病院施設見学等）。コロナ禍以降はオンラインでの実施であったが、島根大学地域未来協創本部地域医学共同研究部門の協力により、現地での医療を中心とした生命科学・工学分野への興味・関心を高めた。

・科学系部活動の充実

課外部活動中の科学研究活動、地域と連携した市民講座の開催、他校との研究交流、科学オリンピック等へ参加した。

<校外の発表会等への参加状況>

日にち	発表会等
7月16日	鳥取西高校研究成果発表会（3年理数科1班参加）
7月19日	島根大学高大連携課題研究発表会（3年理数科1班参加）
7月26日～28日	第49回全国高等学校総合文化祭（2025かがわ総文） 自然科学部 物理班「壁を登るロボットの研究」
8月6日～7日	SSH生徒研究発表会 理数科 化学班「鉛蓄電池の研究」 ポスター発表賞を受賞
10月17日	科学を創造する人財育成事業（米子東高校SSH事業）（6名参加）

10月18日	科学の甲子園全国大会 島根県予選大会 2年生チーム 第2位
1月28日	鳥取西高校研究成果発表会（2年普通科1班参加）
2月10日	しまね探究フェスタ参加（2年理数科・普通科各1班参加）

<各種オリンピック・コンテストの参加状況>

計22名（R6：11名）

（物理：0名、化学：0名、生物：13名、数学：5名、情報：2名、地学：1名、地理1名）

・プロフェッショナルセミナー

様々な職業や専門分野につながる講演や体験的学習を通じて、生徒が視野を広げ、自らの生き方について思索を深めることや第2学年で取り組む「課題研究」に向けた動機づけを行うことをねらいに1年生で実施した。

前期：全体講演1時間＋研究機関(13分野)講師による体験学習・講義2時間

講演「課題研究の重要性」 島根銀行人財事務グループ 次長・高島浩希 氏

後期：生徒個人の希望や興味・関心に応じて、研究機関(14分野)から2講座受講【40分×2講座】

<協力いただいた大学・企業など>

・島根大学：総合理工学部、材料エネルギー学部、教育学部、医学部、法文学部、人間科学部

・島根県立大学：総合政策学部、人間文化学部、短期大学部保育学科、看護栄養学部、

東京大学教養学部、島根県立古代出雲歴史博物館、出雲弥生の森博物館、神門通りおもてなし協同組合、株式会社イッポラボ合同会社、株式会社出雲村田製作所、整体院 kahana|future labo GOEN

4) 国際性の育成

・SSパワーアップセミナー

従来このセミナーは科学研究者による講演・講習会や実習体験研修等、最先端に携わる研究者・技術者との出会いにより、生徒に知的興奮や感動を与え、探究活動や社会貢献に対する意欲を高めることを目的として実施している。本校で実施しているSSHのアンケート結果より国際性の育成に課題があると感じていたため、今年度は現代社会が抱える諸課題への興味・関心を喚起し、将来、地域・社会のリーダーとして、また国際社会で活躍するための姿勢や意識の高揚を図る目的で講師を選定し、実施した。

演題：『バングラデシュの路上から、社会を動かすロールモデルをつくっていく』

講師：NGO エクマットラ 代表取締役 渡辺 大樹 氏

・海外研修の実施

2つの海外研修を実施し、現地大学等の研究機関の先生や現地高校生との発表・ディスカッションを行った。

○シンガポール海外研修：理数科2年生38名全員を対象として1月に3泊5日で実施した。

【研修内容】

①企業研修：AI技術を用いたデマンド型交通サービスを提供する「SWAT Mobility社」による研修を実施し、DXによる社会貢献について学習した。

②学校交流：「Swiss Cottage Secondary School (SCSS)」にて、現地の学生と研究発表やワークショップ、英語でのサイエンスコミュニケーションを行った。

③大学訪問：「シンガポール国立大学 (NUS)」および「南洋理工大学 (NTU)」の研究室を訪問し、教授や学生に向けて英語で自らの「課題研究」を発表し、質疑応答を行った。

④都市・環境学習：「Singapore City Gallery」でシンガポールの都市デザインを学び、「Gardens by the Bay」で最先端技術を融合させた都市緑化の実践について学んだ。

○サンタクララ海外研修：普通科2年生を対象に公募を行い、選抜された16名がアメリカ合衆国カリフォルニア州サンタクララ市で6泊8日のホームステイを行った。

#### 【研修内容】

##### ①企業・施設訪問

- ・Google 本社、Apple Park Visitor Center：

世界的な企業を見学し、最先端の技術を目の当たりにし、社会貢献の視点を養った。

- ・Plug and Play：

有望なスタートアップと革新を求める大企業をマッチングさせ、新しい事業を育てるプラットフォームを運営している企業から、挑戦することの大切さを教わった。

##### ②学校・大学交流

- ・ウィルコックス高校：

現地生徒と一緒に授業を受け、アメリカの高校生の一日を体験した。

- ・ミッションカレッジ：

大学の研究室を訪問して講義を受けたり、現地学生と交流したりした。

- ・スタンフォード大学、サンタクララ大学：

施設を見学したり、研究室を訪問したりした。

本海外研修は将来、地域・社会のリーダーとして活躍するために必要な資質・能力を有した人材を育成することを目的としたグローバルリーダーシッププログラムの一環であり、海外研修以外にも次に示す各種取組を実施した。

(ア) 各種リーダー研修：外部機関が主催する各種リーダー研修や校内で開催される各種講演会等への積極的な参加

(イ) 英検等の積極的受験：英検・GTEC-CBT等の積極的な受験

(ウ) 英語プレゼンテーション演習：英語によるプレゼン用資料作成、英語によるプレゼンテーション演習（11月～3月）

#### 5) 授業改善に資する取組

##### ○“出雲流”授業力向上

- ・SSH事業で提唱した「授業のSS化」を包摂した授業改善の取組を全校の取組として継続。

- ・校内での共通理解や情報共有を目的としてプロジェクトチームを組織し、全教員でのミニ研修会を実施した。また全ての教員が公開授業を実施した。

##### <教員研修>

第1回 6月16日「授業改善・指導力向上への目線合わせ」

第2回 12月19日「“出雲流”授業力向上」中間報告

第3回 2月18日「高質な学力を求める！」

講師：岡山大学学術研究院教育学域 教授 宮本 浩治 氏

- ・11月10日（月）～12日（水）「授業力向上 DAYs」（授業公開週間）

主体的・対話的で深い学びを実践する公開授業を行うことで、本校のグランドデザインや第Ⅲ期SSHに掲げた資質・能力を育む授業プログラムの研究・開発および生徒の学力向上・教員の授業力向上に、全教員で取り組む。今年度は「主体性・課題発見力の育成」、「授業での学びと家庭学習の連携」、「課題研究と教科学習の好循環」のいずれかを目指して授業担当者を中心に授業案を教科内の全教員で検討し、全県に向けて公開授業を行った。授業後は教科内で振り返りを実施し、次の授業実践へむけて検討した。

<公開授業>

日時	実施時程	授業科目
11月10日(月)	2限(9:45~10:35)	体育
	3限(10:45~11:35)	英語C
	4限(11:45~12:35)	数学 $\alpha$
11月11日(火)	3限(10:45~11:35)	数学 $\alpha$
	4限(11:45~12:35)	物理基礎
	5限(13:15~14:05)	古典探究
11月12日(水)	2限(9:45~10:35)	数学 $\alpha$
	3限(10:45~11:35)	地理総合
	4限(11:45~12:35)	BS(情報I代替科目)

⑤ 研究開発の成果

(根拠となるデータ等は「②関係資料」に掲載。)

○3年間のプログラムを通じた変革を担う資質・能力の育成

学年が進むにつれて「主体性」「探究性」「協働性」のすべてにおいて数値が向上しており、SSHプログラムが着実に生徒の資質・能力を育てていることがわかる。

①主体的な学習態度の定着

魅力化データ(②関係資料 pp.22, 23)における「主体性」の項目では、学年を追うごとに顕著な伸びが見られる。意識調査(②関係資料 pp.12~21)でも「主体的に行っているか(問1)」の項目で、理数科は1年時の4.08から3年時には4.62、普通科も3.93へと向上しており、自ら学ぶ姿勢が学校生活全体に浸透していることが分かる。

②探究スキルの高度化と論理的思考

「内容について『なぜそうなるのか』を理解するように、自分で考えたり選べたりした」という回答は、3年生で91.60%という極めて高い数値に達しており、3年次から13.2ptも上昇している。

科学的・論理的判断:「データに基づき考え、判断する」能力(課題解決能力)については、3年生で70.10%(2年次比+11.7pt)となっており、探究基礎や課題研究を通じて、エビデンスに基づいた思考が身につけている成果と言える(②関係資料 pp.22, 23)。

③協働性と社会への発信力

他者との関わりや、校外の大人との連携についても、SSHの活動(地域連携や発表会)が大きく寄与している。「協働性に関わる学習活動」は、3年生で85.80%に達しており(②関係資料 pp.22, 23)、また意識調査においても、理数科3年生の「他者と協力して課題に取り組む(問11)」項目が4.78と非常に高い満足度を示している(②関係資料 p.14)。自分一人では気づかなかった視点を、議論を通じて得るプロセスが確立されている。

以上のデータ推移を総合すると、SSHの成果として以下の3点が結論付けられる。

- ・3年間を通じて、生徒が「自分で考え、自分で調べる」スタイルを確立しており、これは魅力化データ(②関係資料 pp.22, 23)にある「主体性」の10pt以上の向上に明確に現れていることから「受け身」から「能動」への転換が図られている。

- ・授業アンケート等でも見られる通り、「自分の理解が浅いことに気づく」「友達の意見で考えが広がる」といった、自身の思考を客観視し、深化させる力が養われてることからメタ認知能力の向上が見られる。

- ・地域の大人との対話や、社会課題(魅力化データ内の「地域とのつながり」等)への関心が高まることで、科学技術を社会にどう活かすかという「イノベーション人財」としての意識が3年次にかけて完成に向かっている。

○1年「Basic Science」(以下BS)の改善

データサイエンスは課題研究の質の向上において不可欠なものであるが、高校教員で専門的に指導できる人材が少ない。そこで第Ⅲ期開始より島根大学数理・データサイエンス教育研究センターと連携した取組として大学の専門教員と本校情報教員によるオンデマンド型授業を展開した。動画

は自分のペースで繰り返し視聴することができ、質問は授業担当者である情報教員で答えることができなければ、大学教員がメールや電話等で回答するといった授業支援体制を組んだ。大学教員による講義を受けることができ、専門性の高い授業となった。2年間の大学教員による授業を踏まえて本校の情報担当教員が独自の教材を開発し、授業を実施した。意識調査（②関係資料 p.13）において、1年生の5月（実施前）と1月（実施後）を比較すると、「物事を論理的に考える力」の自己評価が理数科・普通科ともに向上している。これは、BS で実施される「データサイエンス演習」や「統計処理」を通じて、数字に基づいた判断力が養われている成果である。また、APRIN（公正研究推進協会）などの教材を用いた指導により、引用のルールや研究不正の防止といった、専門的な探究活動に不可欠な「研究の作法」が全生徒の共通認識となり研究倫理の育成の機会となっている。この授業は単なるスキルの習得にとどまらず、生徒が2年生で本格的に研究を進めるための「論理的な根拠を持って自ら問いを立て、解決しようとする姿勢」を育む上で極めて重要な役割を果たしている。

### ○授業改善の取組

2学期の授業アンケート結果（②関係資料 pp.14, 15）から、授業改善の具体的な成果が確認されている。全学年において、1学期と比較して2学期の肯定的な回答平均値が上昇した。「すぐ答えを言われたいのがよい」「自分で考える時間がある」といった、教員が「待つ授業」を実践していることへの肯定的な評価が多く見られ、友人との意見交換を通じて「自分の考えが広がった」「説明することで自分の理解が浅いことに気づいた」など、対話的学びが理解を深める契機となっている。また、「記述問題でうまくまとめられない」といった自己課題の明確化や、「復習を自分からするようになった」といった主体的学習への変化がうかがえる。

「“出雲流” 授業力向上」の推進を通して生徒の変容だけでなく教員の意識変化も見られた。教材研究を1人で行うのではなく、同じ教科や他教科の教員と気軽に相談し合える環境が構築されつつあるだけでなく、具体的な手法や問いかけの効果、生徒の学びの傾向について、教員同士が日常的に語り合えるようになってきている。また、公開授業週間である「授業力向上 DAYs」の実施や全教員が公開授業を行うことで主体的・対話的で深い学びの実践に向けた研究開発を全校体制で進めている。

### ⑥ 研究開発の課題

（根拠となるデータ等は「②関係資料」に掲載。）

#### ○「論理的思考力・表現力」の定着と自信の欠如および「課題発見力」のさらなる強化

意識調査の結果（②関係資料 pp.13, 15）から、生徒が自分の能力に対して依然として課題を感じていることが見て取れる。「物事を論理的に考える力があるか」という問いに対し、1年次から3年次にかけて肯定的な回答は増えているものの、「記述問題でうまくまとめられない」「語彙が足りない」といった自己分析が授業アンケートでも散見され、高いレベルでのアウトプットに対する自信が不足している。また、「課題発見力」の強化は第Ⅲ期の重点目標であるにもかかわらず、生徒の主観的な手応えに課題が見られる。意識調査（問 14）「課題解決に向けた有益な考えを構築する力があるか」という設問では、理数科・普通科ともに平均値が他の項目に比べて低い傾向にある。各教科の授業の中でも受動的な姿勢から脱却し、自ら問いを生み出して探究をスタートさせる「課題発見」のフェーズにおいて、教員の支援なしに動ける生徒をいかに増やすかが継続的な課題である。現在全教員で力をいれて取り組んでる授業改善の取組と課題研究の両輪で生徒の資質・能力の向上に努めたい。

#### ○SSHの取組に対する「保護者の理解」と「家庭での浸透」

保護者向けの意識調査（②関係資料 p.20）において、生徒や教員との温度差が見られる。明確な否定傾向は見られないが、生徒および教員と比較すると評価水準は低く、特に学力や進路への直接的効果については慎重な見方が示されている。「SSHの取組がお子さんの科学技術への興味を高めているか」という問いに対し、保護者の平均値は約 2.9（4段階評価）に留まり、前年度比でも微減または横ばいであることや地域や国際社会への関心（問 2）についても同様の傾向があり、学校

での探究活動の成果や意義が、家庭において十分に実感・共有されていない。保護者は生徒の進路や成績といった可視的成果を基準に判断するため、評価が相対的に低くなってしまふことが考えられる。改善策として、生徒が探究活動を通じてどのように成長したか（論理的思考力や情報発信力の変容など）を、数値データや具体的な活動事例を交えて学校通信等で積極的に発信する。また、年度末の成果発表会だけでなく1年生SS探究基礎のクラス発表会、2年生ゼミ別発表会等への保護者の招待を強化し、生徒が堂々と発表する姿を直接見る機会を増やすことで、取組への理解と効果実感の向上を図りたい。

### ○トップサイエンティストの育成

令和元年度に高校生科学技術チャレンジで文部科学大臣賞を受賞して以降、今年度指定初めてSSH 生徒研究発表会においてポスター発表賞を受賞することができた。しかし、指定13年目としては全国大会レベルの受賞歴が乏しい。また、発表会や各種コンテストへの参加については自然科学部を中心に全校生徒へ呼びかけを行っているものの参加生徒数は減少傾向にある。本校は部活動の参加率が高く、他の部活動と兼部している生徒も多いため、発表会やコンテストの開催日が部活動の公式戦等と重なって出場できない生徒もいる。近年島根県内において普通科に比べて理数科の志願倍率が低く、定員に満たない学校もある。トップサイエンティストの育成には理数科の活性化が必要である。例えば夏休みなどに、中学生が理数科の実験室で数日間かけて本格的な研究を体験できるプログラムを設けるなど、理数科の魅力発信に資する取組の実施も検討すべきと考える。

### ○授業改善の推進

校内の授業改善の意識は醸成され、「問い」を軸とした探究的な授業への転換がはかられている。公開授業や研究授業の機会だけではなく平素の授業においても生徒が「問い」を解決し、さらに「問い」を残すことにつながる授業場面の連続性の構築が必要である。出雲高校の「学びのスタイル」指導改善PDSAサイクル（②関係資料 p. 20）を回して生徒の学力向上および教師の指導力向上につなげていきたい。

### ○オンラインデータベース「叢雲」（むらくも）の効果的な活用

本校が培ってきた「探究のノウハウ」を社会や次世代に還元し、さらなるイノベーションを生むための重要なツールとして本校が開発したものである。全山陰の高校を対象として共同データベースとして運用し、他校との共同研究へのつなげることや過去の先行研究を参考とすることを期待しているが、他校での登録は1校のみである。データベースを活用しての他校とのつながりなど効果的な活用にはつながっていない。

島根県立出雲高等学校 教育課程表

課程	学科	類型の名称
全日制		

令和7年度全学年

教科	科目	標準単位数	普通科					理数科				
			1年	2年		3年		単位数の合計	1年	2年	3年	単位数の合計
				文	理	文	理					
国語	現代の国語	2	2					2			2	
	言語文化	2	3					3			2	
	論理国語	4		3	2	3	2	4~6		2	2	4
	古典探究	4		3	2	3	3	5~6		2	3	5
	国語探究	学校設定科目						0~2				
地理歴史	地理総合	2	2					2				2
	地理探究	3						0~6				0~4
	歴史総合	2		2	2			2	2			2
	日本史探究	3						0~6				0~4
	世界史探究	3		2				0~6			0~4	0~4
	世界史特論	学校設定科目						0~3				
	日本史特論	学校設定科目						0~3				
公民	公共	2		2	2			2		2		2
	倫理	2						0~3				
	政治・経済	2						0~4			0~4	0~4
数学	数学Ⅰ	3	3					3	(3)			(3)
	数学Ⅱ	4	1	2	2	ア3		3~6				
	数学Ⅲ	3						0~6				
	数学A	2	2					2				
	数学B	2		2	2			2				
	数学C	2		2	1			2~3				
	数学探究A	学校設定科目						0~2				
	数学探究B	学校設定科目						0~5				
理科	物理基礎	2	2					2		(2)		(2)
	物理	4						0~6				
	化学基礎	2		2	2			2	(2)			(2)
	化学	4		2				0~6				
	生物基礎	2	2					2	(2)			(2)
	生物	4						0~6				
	物理探究	学校設定科目						0~2				
	化学探究	学校設定科目						0~2				
保健体育	体育	7~8	2	3	3	2	2	7	2	3	2	7
	保健	2	1	1	1			2	1	1		2
芸術	音楽Ⅰ	2						0~2				0~2
	美術Ⅰ	2						0~2				0~2
	書道Ⅰ	2	2					0~2	2			0~2
	英語コミュニケーションⅠ	3	3					3	3			3
外国語	英語コミュニケーションⅡ	4		4	3			3~4		3		3
	英語コミュニケーションⅢ	4				4	4	4			4	4
	論理・表現Ⅰ	2	3					3	3			3
	論理・表現Ⅱ	2		2	2			2		2		2
	論理・表現Ⅲ	2				3	2	2~3			2	2
	英語探究	学校設定科目						0~3				
家庭情報	家庭基礎	2	2					2	2			2
	情報Ⅰ	2	(1)	(1)	(1)			(2)	(1)	(1)		(2)
理数	理数探究	2~5							(1)	(1)		(2)
共通教科・科目単位数計			30	30	30	26~31	31	86~91	19	17	17	53
理数	理数数学Ⅰ	4~8							5			5
	理数数学Ⅱ	6~12								4	5	9
	理数数学特論	2~6							1	2	2	5
	理数物理	3~10								3	4	3~8
	理数化学	3~10							2	3	3	8
音楽	音楽理論	2~15						0~2				
	ソルフェージュ	2~6						0~3				
美術	素描	2~18						0~3				
	構成	2~6						0~2				
S	Basic Science	学校設定科目	1					1	1			1
	SS探究基礎	学校設定科目	1					1	1			1
	SS探究発展A	学校設定科目		2	2	1	1	3				
	SS探究発展B	学校設定科目								2	1	3
専門教科・科目単位数計			2	2	2	1~6	1	5~10	13	15	15	43
総合的な探究の時間			(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(3)	(1)	(1)	(1)	(3)
目立活動			0~1	0~1	0~1	0~1	0~1	0~3	0~1	0~1	0~1	0~3
ホームルーム活動週当たり時数			1	1	1	1	1	3	1	1	1	3
単位数及び週当たり時数の合計			33~34	33~34	33~34	33~34	33~34	99~102	33~34	33~34	33~34	99~102
学校設定科目単位数計			2	2	2	5~13	1~6	5~17	2	2	1	5

※数学・外国語・理数における同一名の科目は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの順に履修する。

※第2学年文系の地理歴史は、「歴史総合」2単位を履修後、「世界史探究」「日本史探究」「地理探究」から1つを選択し、履修する。また、「世界史探究」「日本史探究」「地理探究」は第2・3学年において継続して履修する。

※第3学年文系における選択Aは、「数学Ⅱ」「英語探究」「ソルフェージュ」「素描」から1つを選択し履修する。

※第3学年文系における選択Bは、「国語探究」「数学探究A」「音楽理論」「構成」から1つを選択し履修する。

※第3学年文系における選択Cは、「世界史特論」「日本史特論」「地理特論」「倫理」「政治・経済」から1つを選択し履修する。なお、選択Cにおいて「世界史特論」を選択する者は、「日本史特論」または「地理特論」を選択してはならない。同様に「日本史特論」を選択する者は「世界史探究」または「地理探究」「地理特論」を選択する者は「世界史探究」または「日本史探究」を選択してはならない。

※普通科理系の第3学年における選択Dは、「世界史探究」「日本史探究」「地理探究」「政治・経済」から1つを選択し、履修する。

※理数科の第3学年における選択Eは、「世界史探究」「日本史探究」「地理探究」「政治・経済」から1つを選択し、履修する。

※普通科理系第2学年の理科は、「化学基礎」を履修後、「化学」を履修する。また、「生物」「物理」から1つを選択し、履修する。「生物」「物理」は、第2・3学年において継続して履修する。

※第2学年理数科の理科は、「理数物理」3単位を履修後、「理数物理」または「理数生物」を選択し1単位を履修する。また、「理数物理」「理数生物」の2年次1単位と3年次4単位は、継続して履修する。

※「情報Ⅰ」は、第1学年において、理数科・普通科ともに「Basic Science」で1単位を、第2学年において、理数科については「SS探究発展B」で、普通科については「SS探究発展A」で、それぞれ1単位を代替している。

※普通科の「総合的な探究の時間」は、第1学年において「SS探究基礎」1単位、第2・3学年において「SS探究発展A」1単位ずつの計3単位で、それぞれ代替している。

※理数科の「総合的な探究の時間」は、「理数探究」2単位の履修をもって代替している。なお、1年次の「総合的な探究の時間」は「SS探究基礎」1単位で、「理数探究」は2・3年次の「SS探究発展B」2単位で代替している。

(資料2) 各種分析基礎資料

(2-1) 意識調査

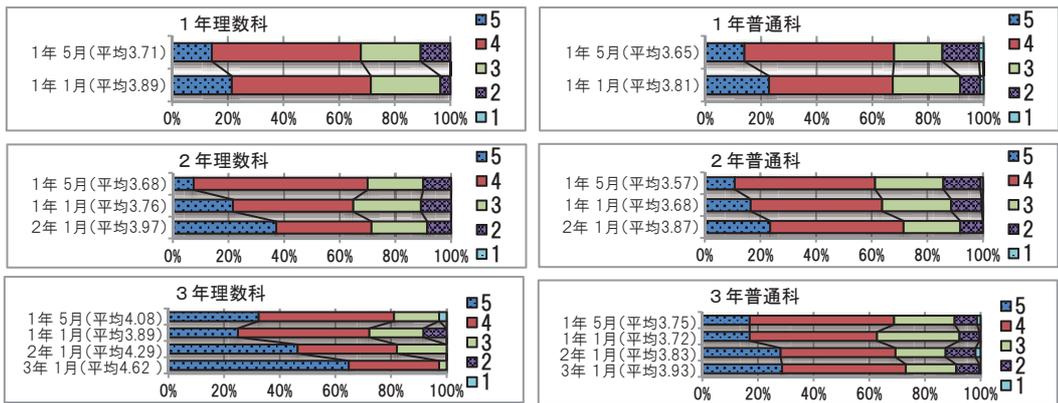
①生徒

今年度の教育プログラムの実践前後で、生徒の意識にどのような変容が見られたか評価するための客観的材料として、過年度実施した質問内容を基本とし、令和7年5月（第1回）と令和8年1月（第2回）に実施した。主な結果は以下のとおりである。

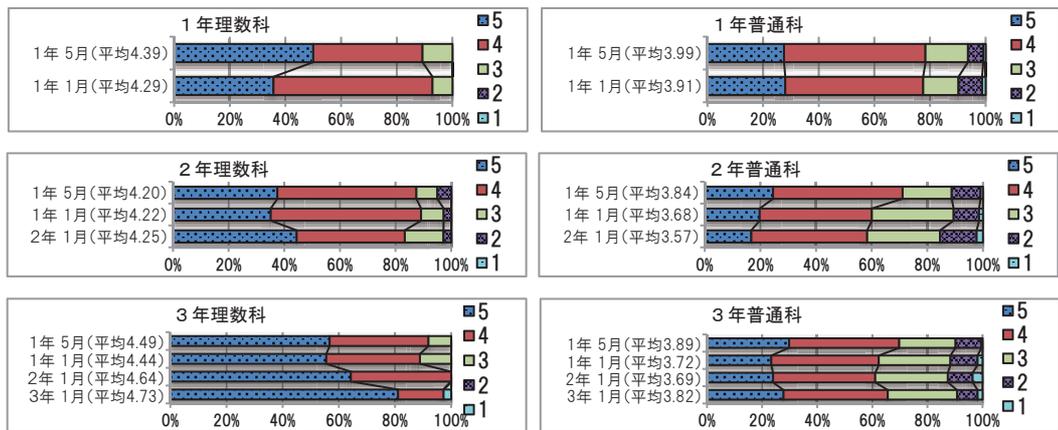
<回答基準>

5：とてもそう思う、4：そう思う、3：どちらでもない、2：あまり思わない、1：全く思わない

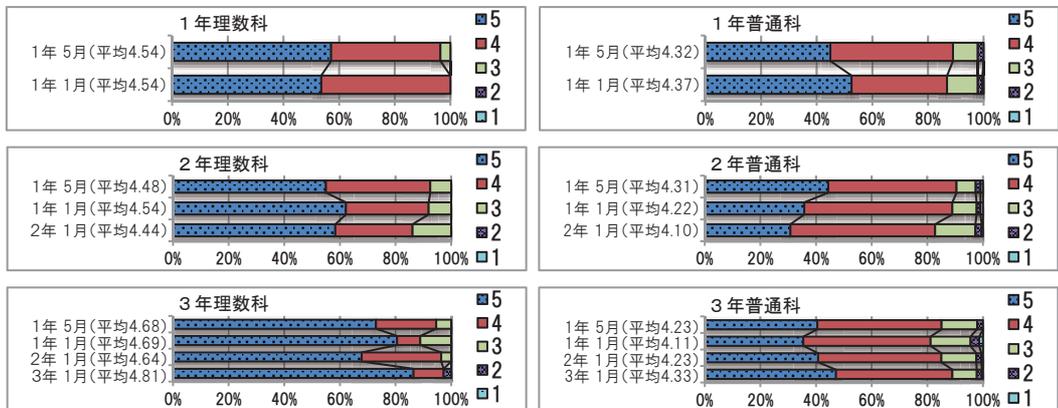
問1 あなたは、物事を受け身でなく主体的に行っていると思いますか。



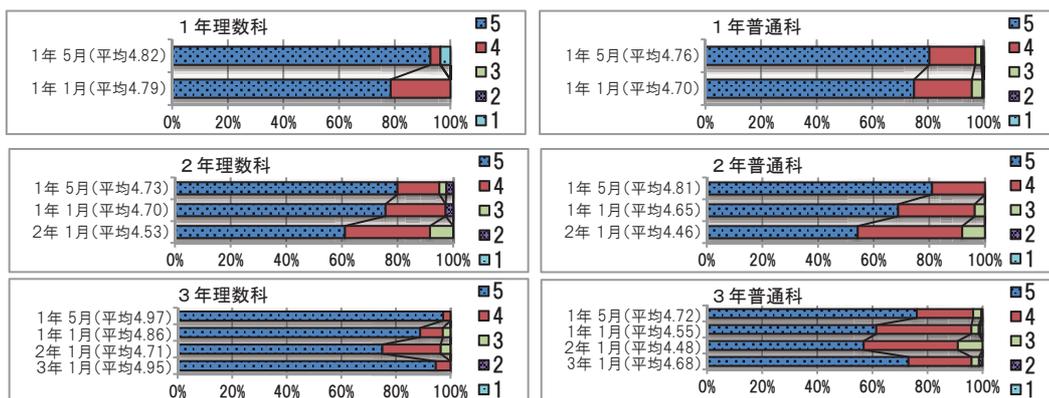
問2 あなたは、世の中の科学的な事柄に興味・関心がありますか。



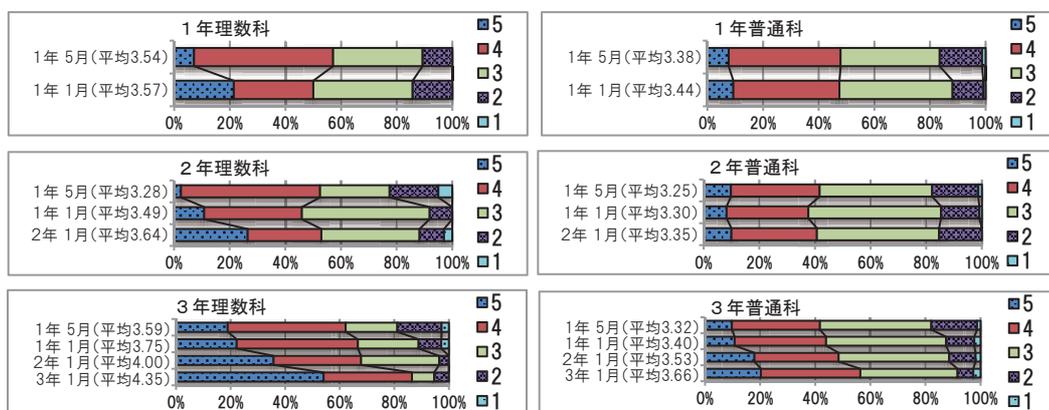
問3 あなたの普段の生活に、科学的な知識やものの見方は有用だと思いますか。



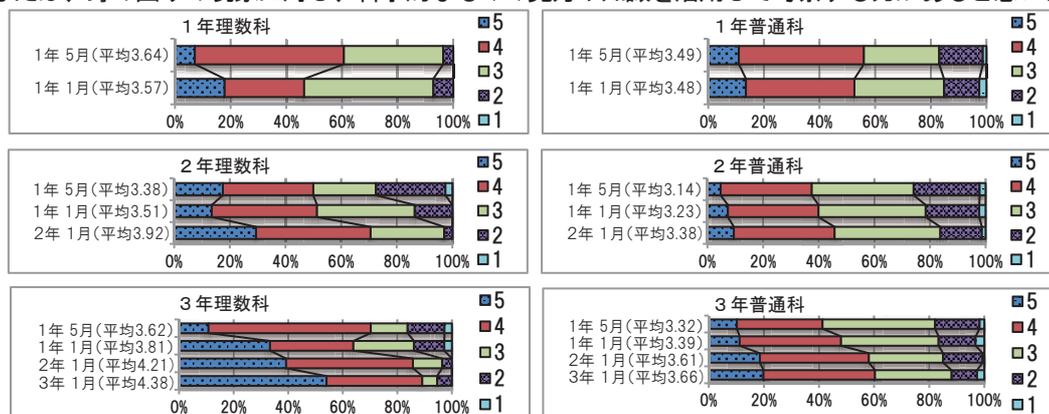
問4 あなたは、社会の発展に科学的な知識や技術が有用だと思いますか。



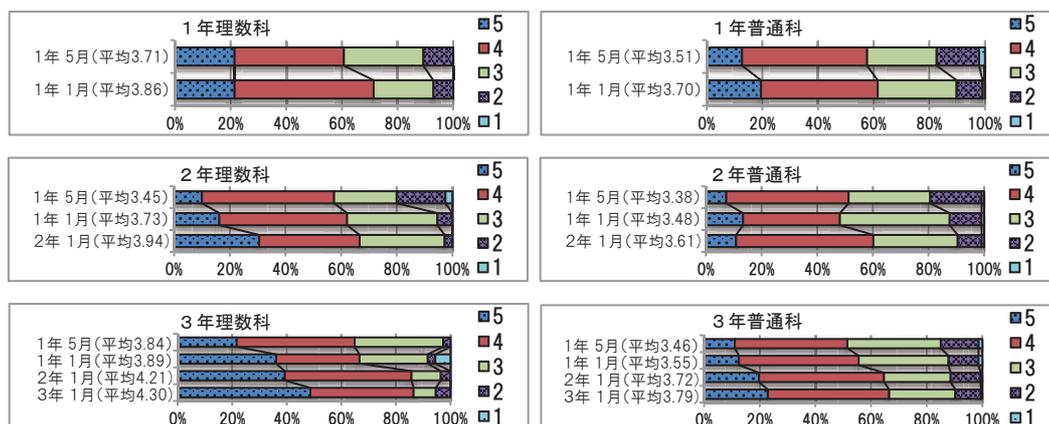
問5 あなたは、基本的・基礎的な科学の知識や技術が身に付いていると思いますか。



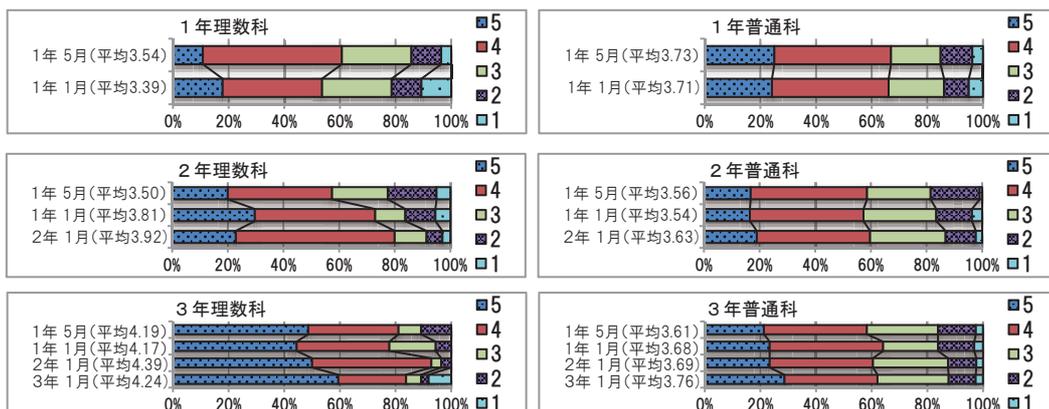
問6 あなたは、身の回りの現象に対し、科学的なものの見方や知識を活用して考察する力があると思いますか。



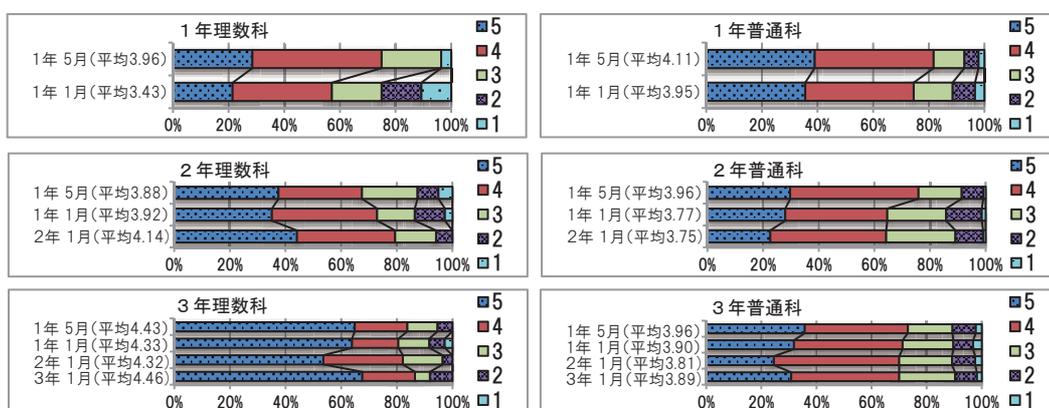
問7 あなたは、物事を論理的に考える力があると思いますか。



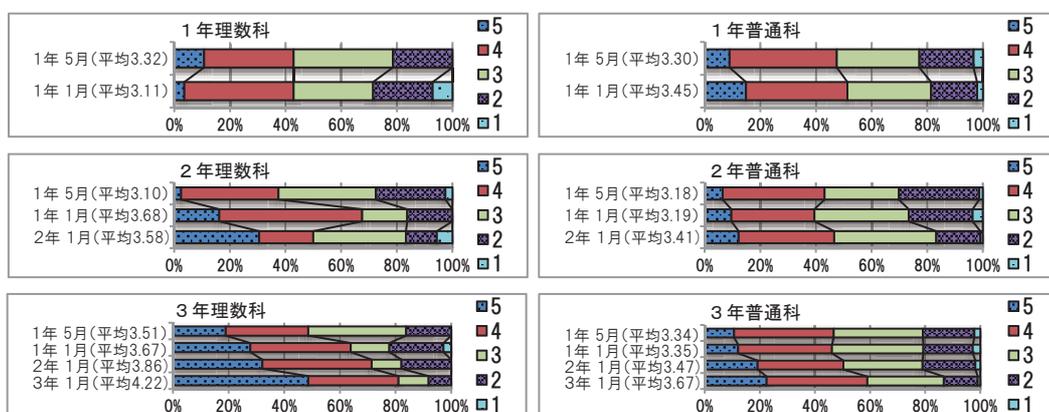
問8 あなたは、身近な地域の事柄や課題に興味・関心がありますか。



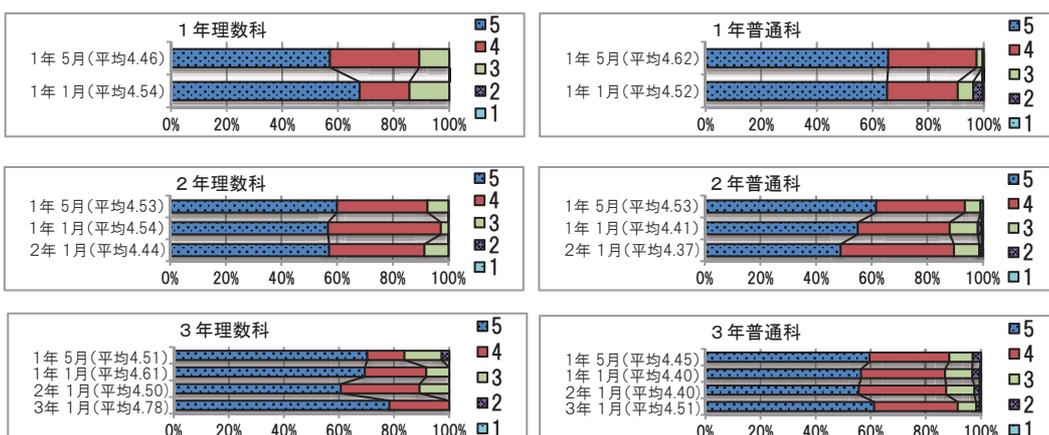
問9 あなたは、国際的な社会課題に興味・関心がありますか。



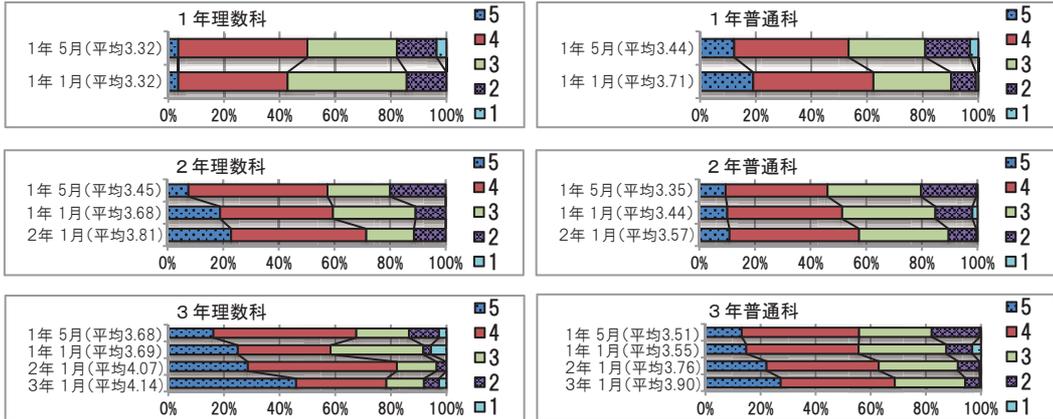
問10 あなたは、伝えたいことを論理的に伝えたり発表したりする力があると思いますか。



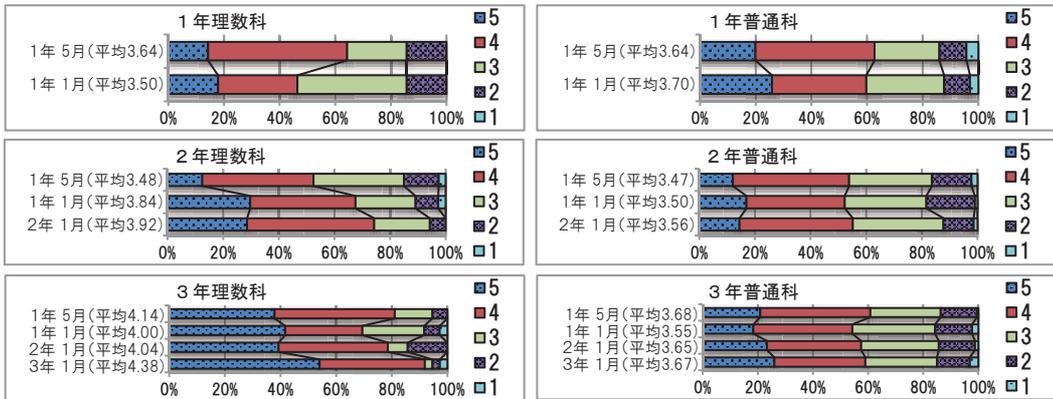
問11 あなたは、他の人と協働して学習することが大切だと思いますか。



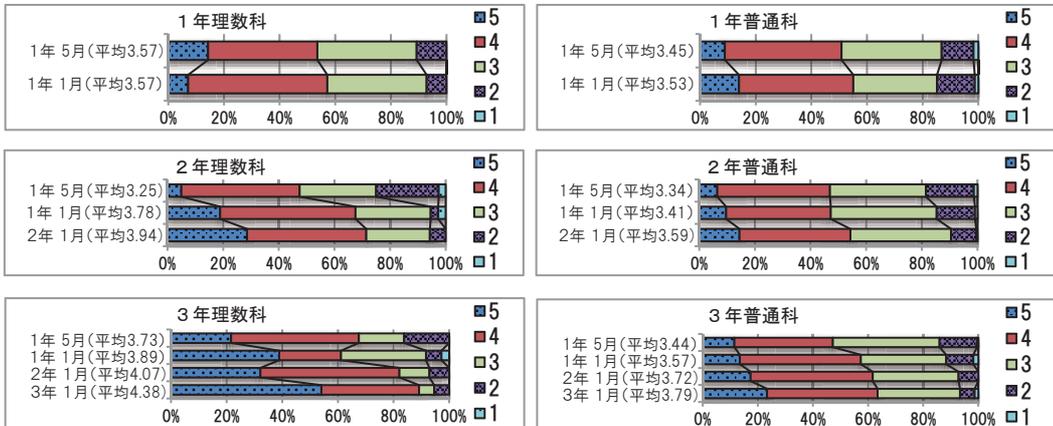
問12 あなたは、自ら（世の中や身近な生活の中の）課題を見つける力があると思いますか。



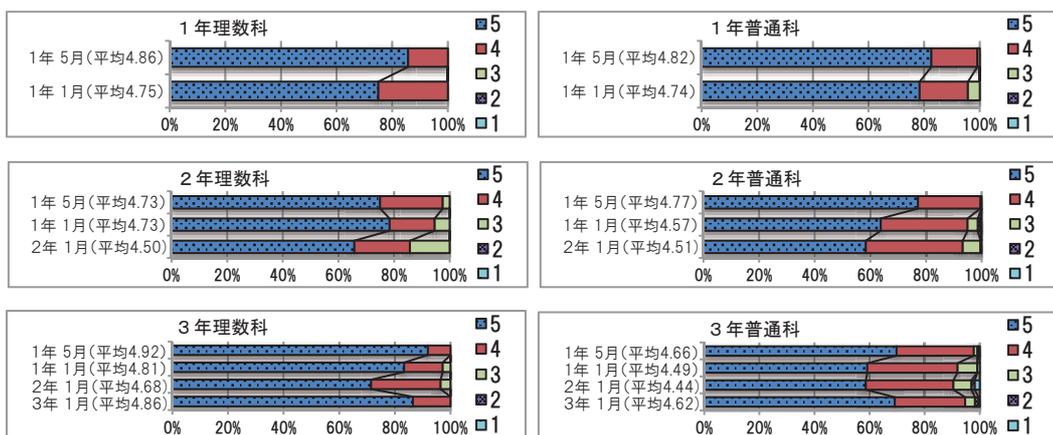
問13 あなたは、課題を進んで解決しようとする行動力や使命感があると思いますか。



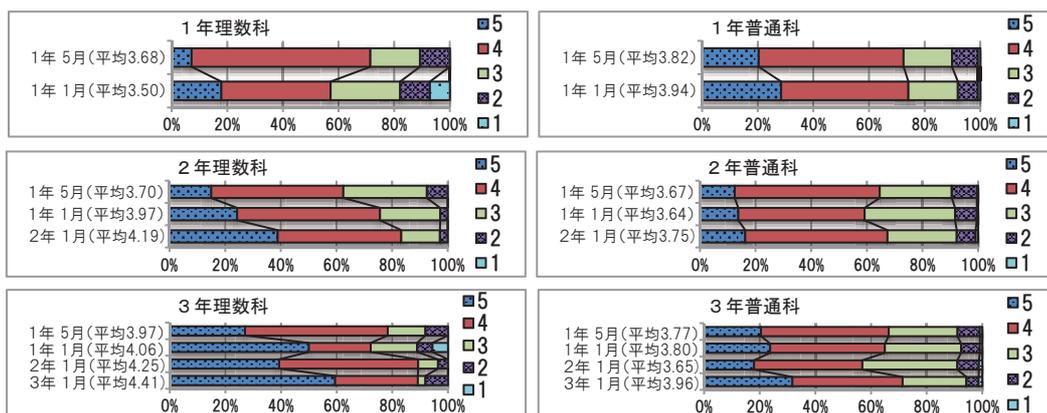
問14 あなたは、課題の解決に向けた有益な考えを構築する力があると思いますか。



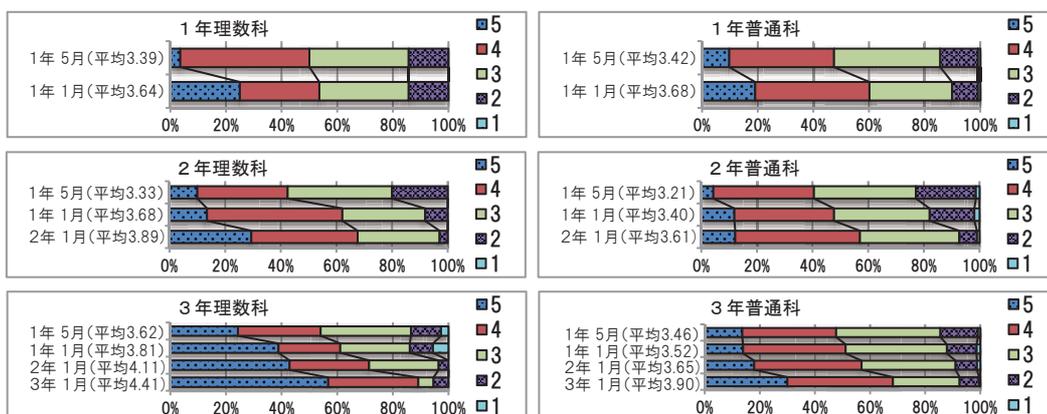
問15 あなたは、課題の解決に向けて、自分とは異なる考え方も大切だと思いますか。



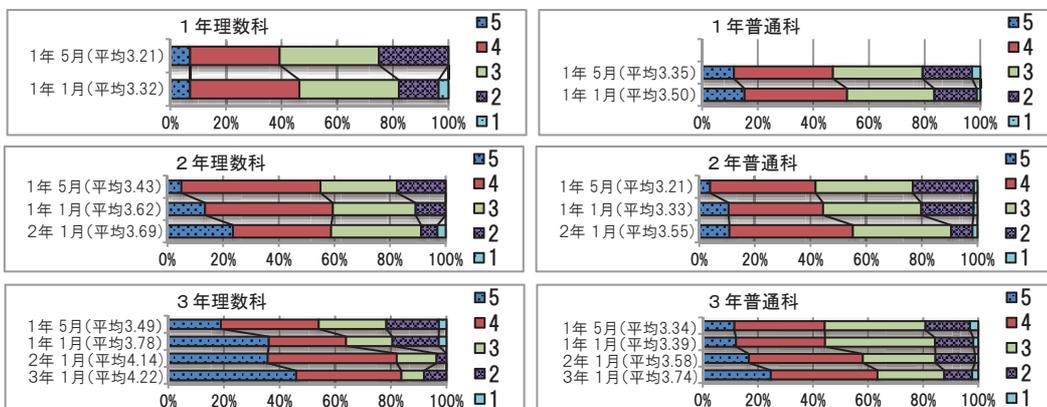
問16 あなたは、様々な情報を集め、整理する力があると思いますか。



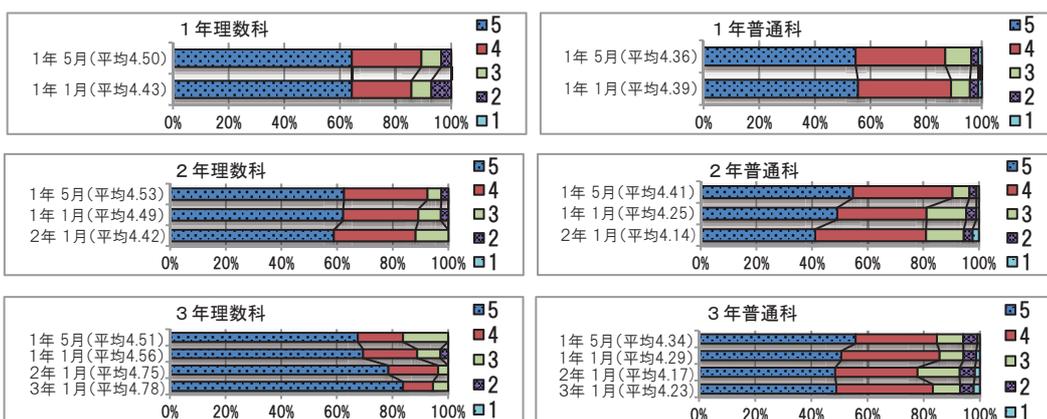
問17 あなたは、収集した情報を多角的に分析する力があると思いますか。



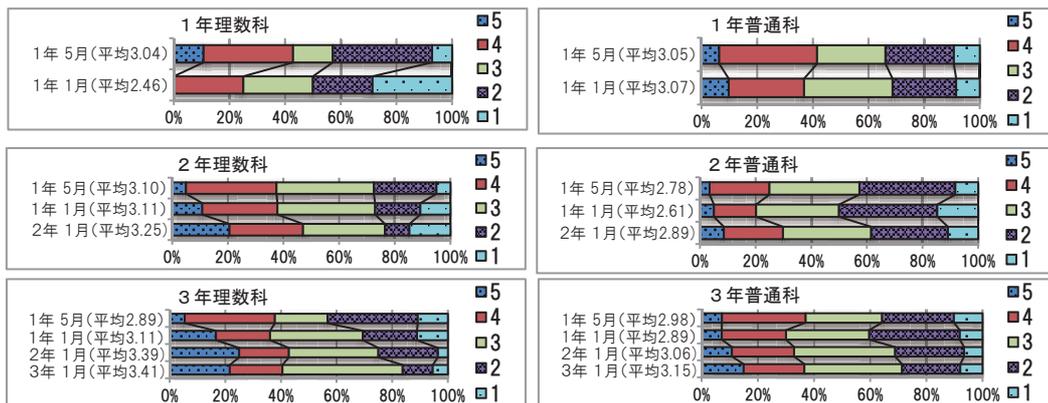
問18 あなたは、自らの考えや成果を的確に情報発信する力があると思いますか。



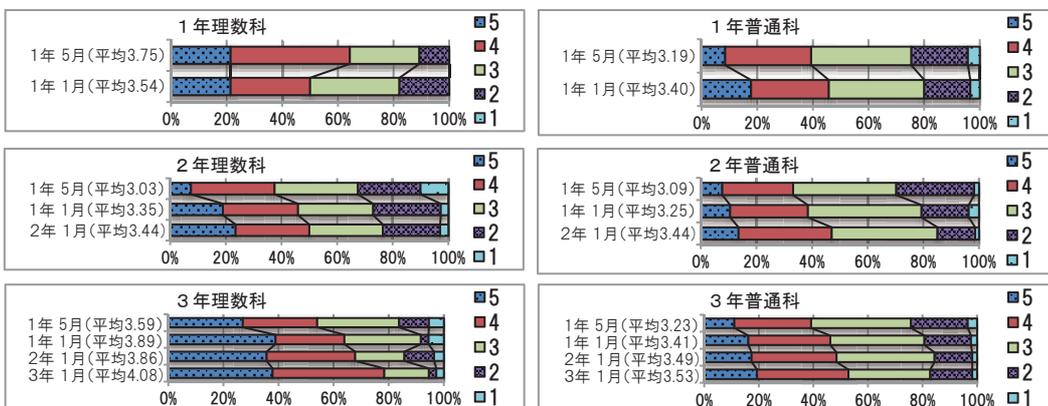
問19 あなたは、英語を使ったコミュニケーションが大事だと思いますか。



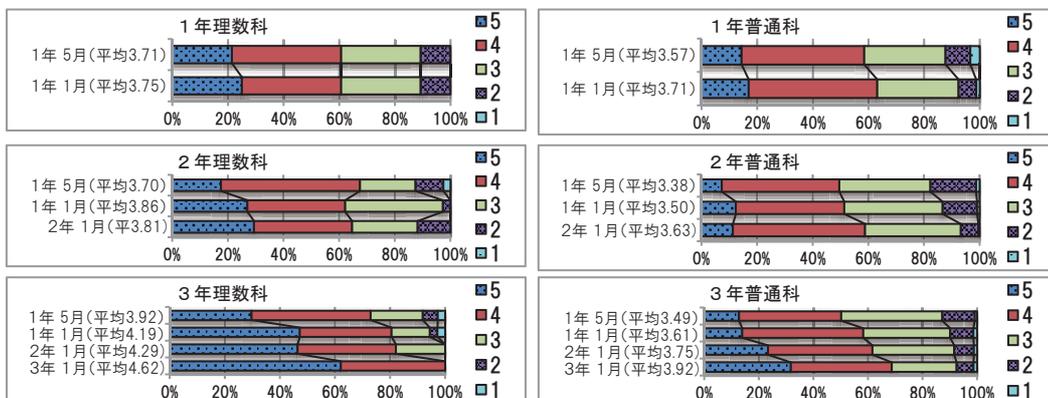
問20 あなたは、英語を使ったコミュニケーション能力があると思いますか。



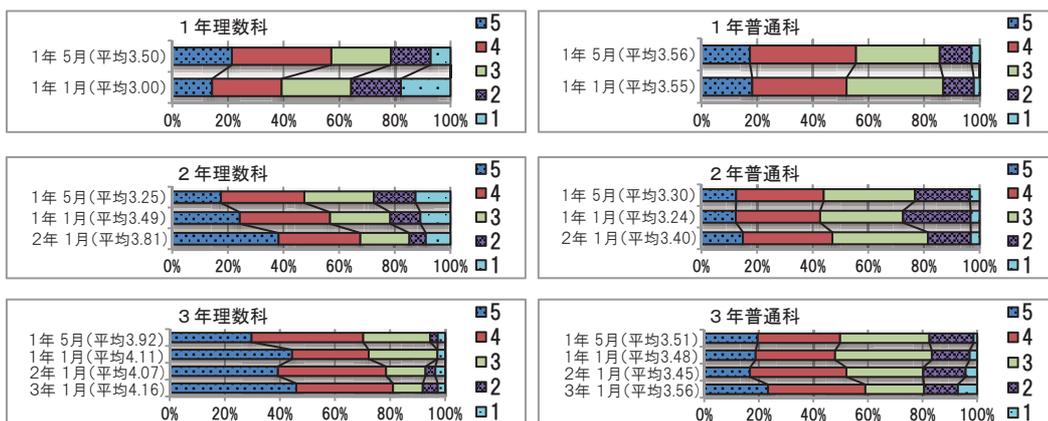
問21 あなたは、新たな価値観や技術を生み出す創造力があると思いますか。



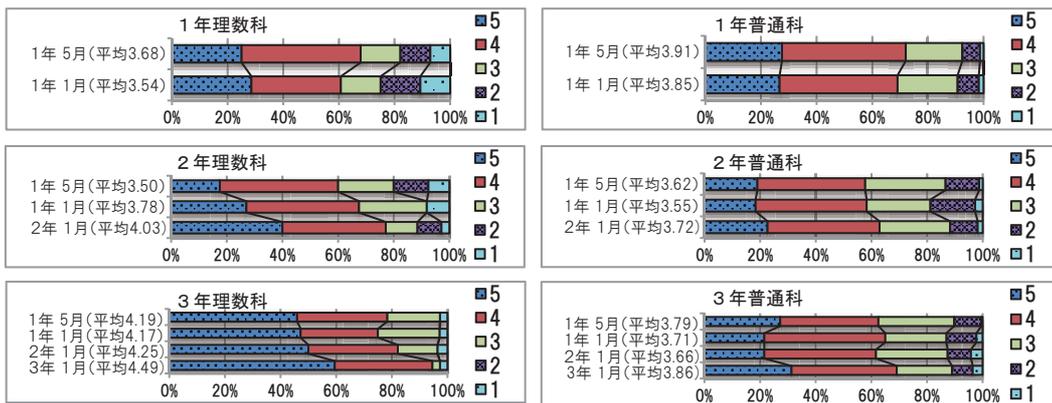
問22 あなたは、科学技術や情報を正しく活用する倫理観を身に付けていると思いますか。



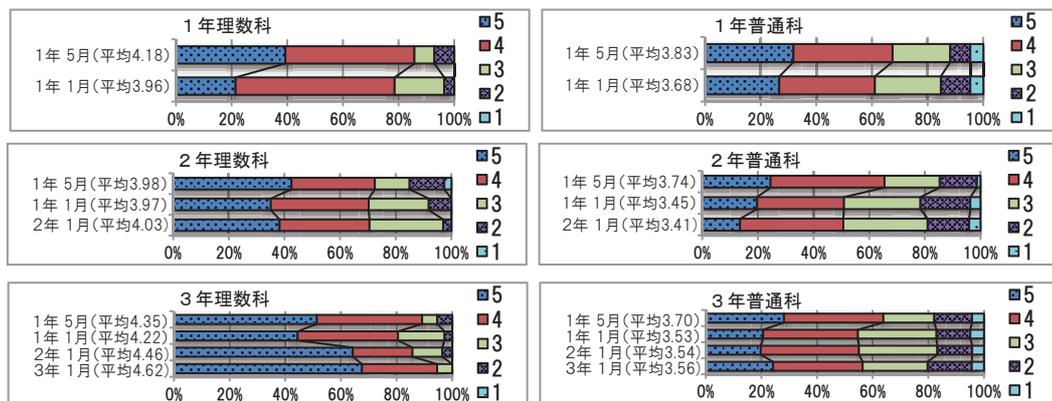
問23 あなたは、将来、国際社会のために貢献すべきだという使命感を持っていますか。



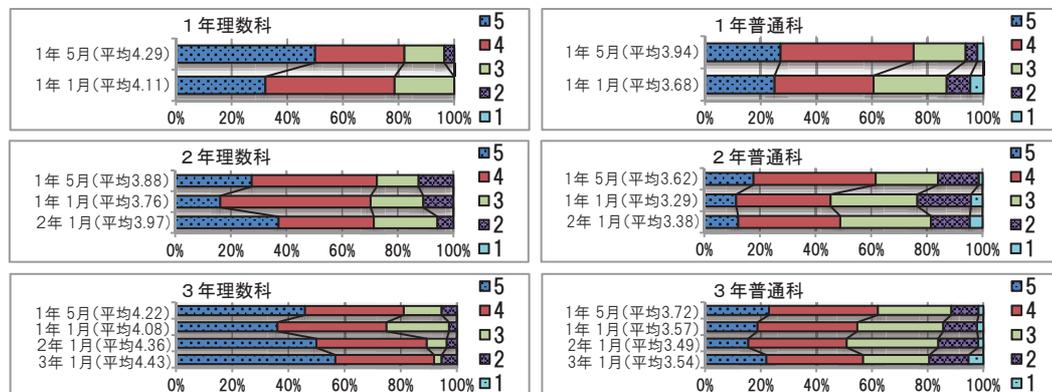
問24 あなたは、将来、社会全体のために貢献すべきだという使命感を持っていますか。



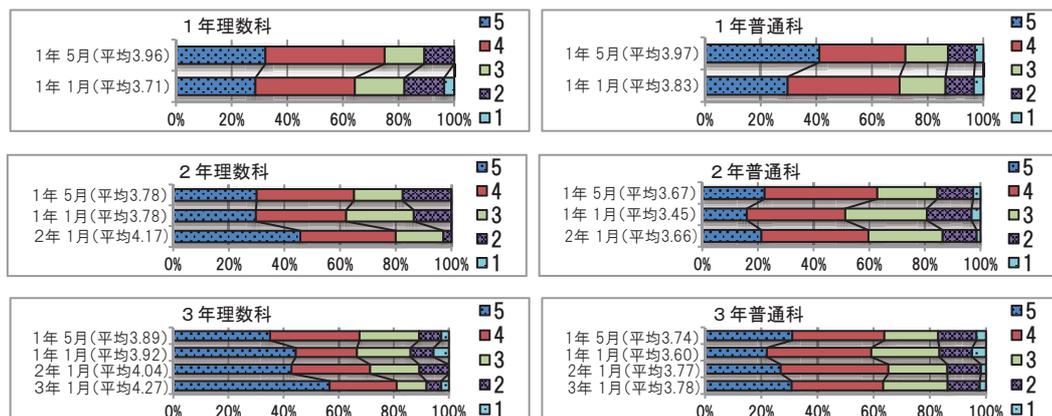
問25 あなたは、最新の科学の研究成果に興味・関心がありますか。



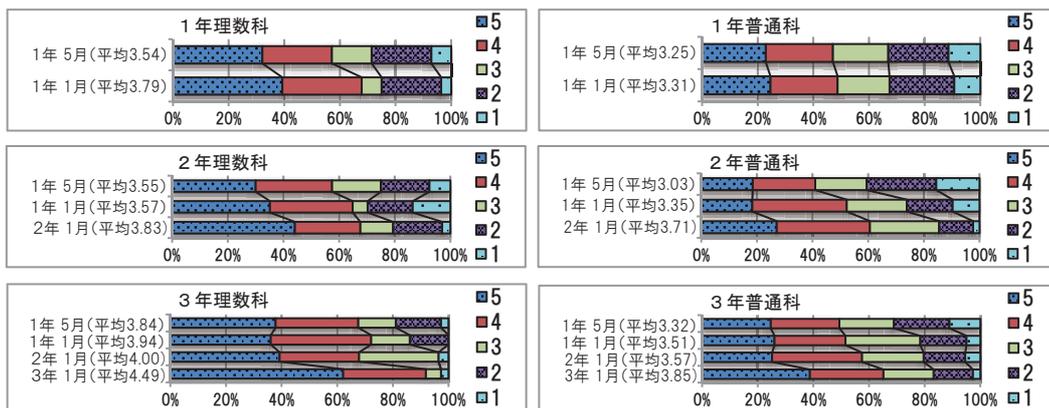
問26 あなたは、科学的な事柄を納得するまで探究しようとする意欲があると思いますか。



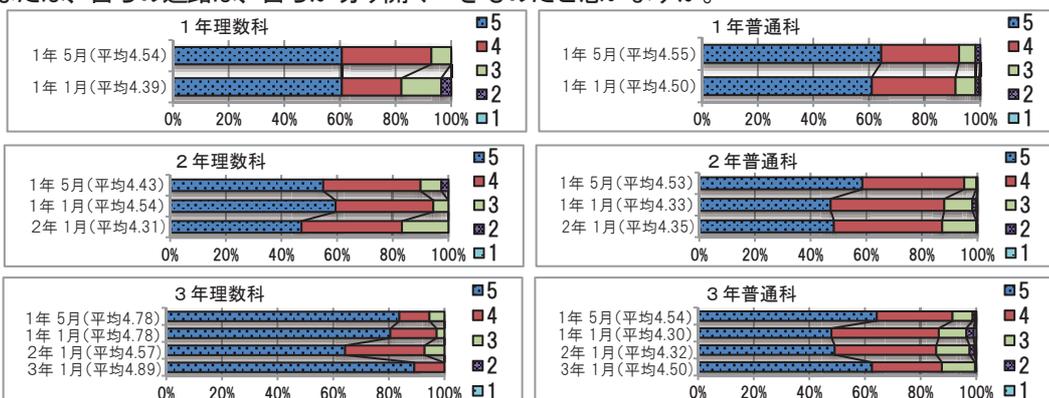
問27 あなたは、自らを追い込み、最後までやり抜く忍耐力があると思いますか。



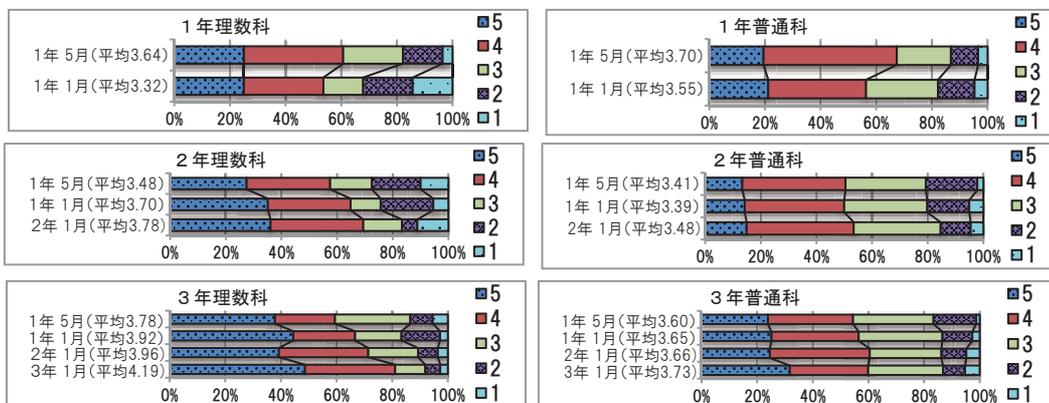
問28 あなたは、将来の進路について、明確な方向性を持っていますか。



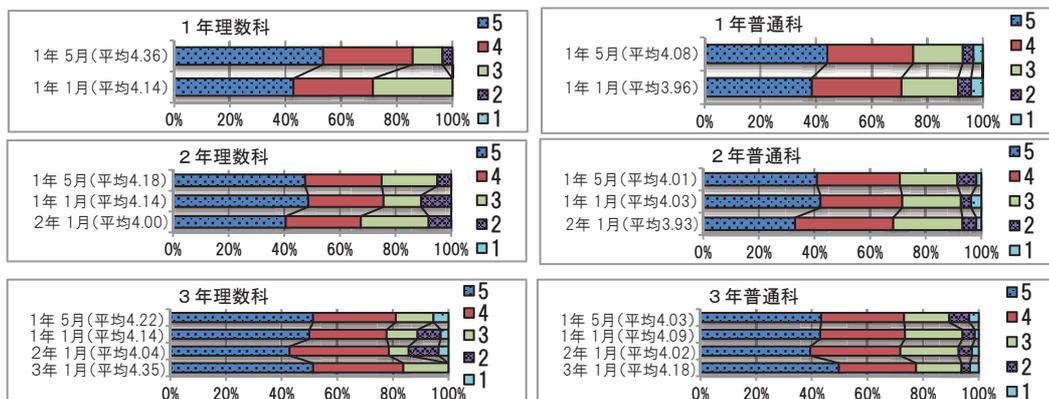
問29 あなたは、自らの進路は、自らが切り開くべきものだと思いますか。



問30 あなたは、将来、地元地域のために貢献すべきだという使命感を持っていますか。



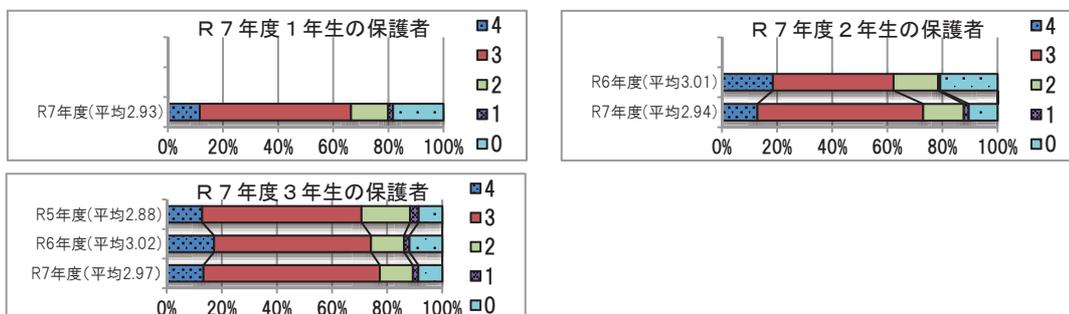
問31 あなたは、自らは大切でかけがえのない存在であると思いますか。



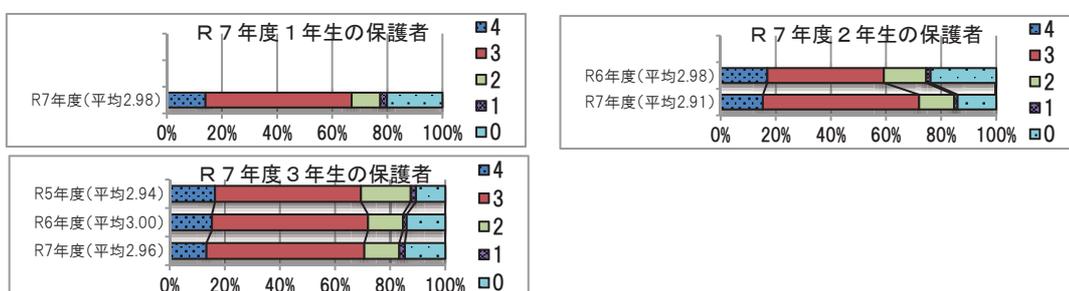
## ② 保護者

保護者のSSHに関する意識調査を、令和8年1月に実施した。結果は以下のとおりである（回答基準は（4：とてもそう思う、3：大体そう思う、2：あまり思わない、1：思わない、0：よく分からない）の4段階とした。

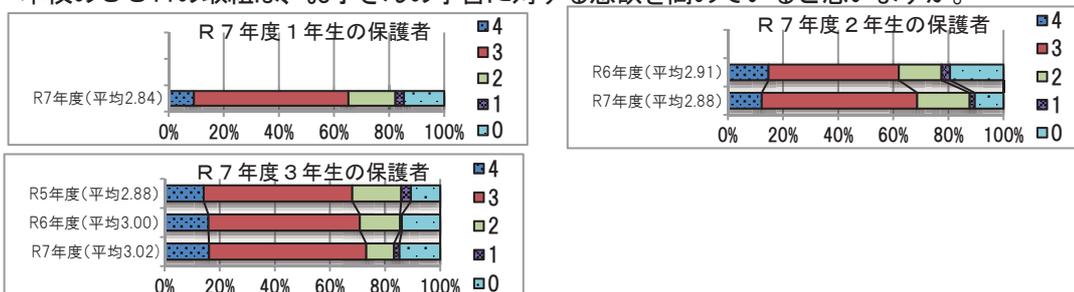
問1 本校のSSHの取組は、お子さんの科学技術に対する興味・関心を高めていると思いますか。



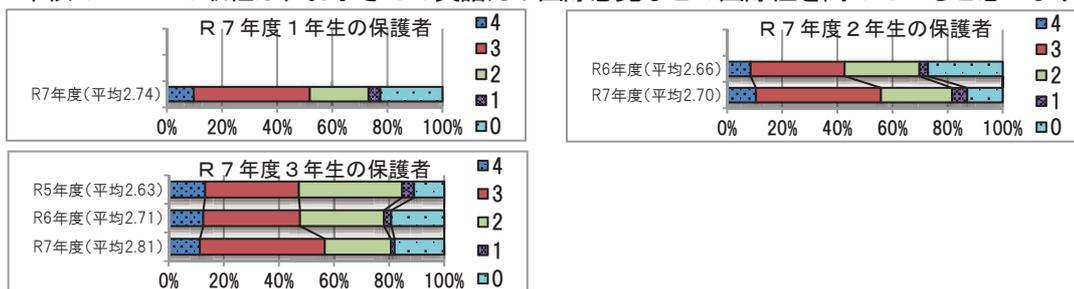
問2 本校のSSHの取組は、お子さんの地域や国際社会に対する興味・関心を高めていると思いますか。



問3 本校のSSHの取組は、お子さんの学習に対する意欲を高めていると思いますか。



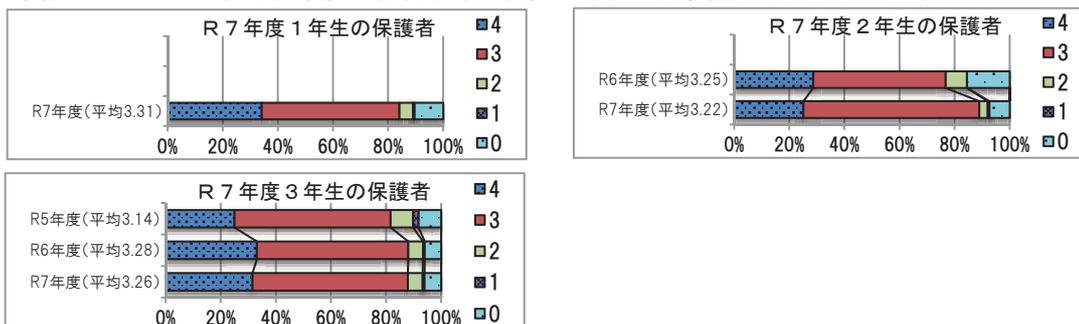
問4 本校のSSHの取組は、お子さんの英語力や国際感覚などの国際性を高めていると思いますか。



問5 本校のSSHの取組は、お子さんの将来の進路に対する意識を高めていると思いますか。

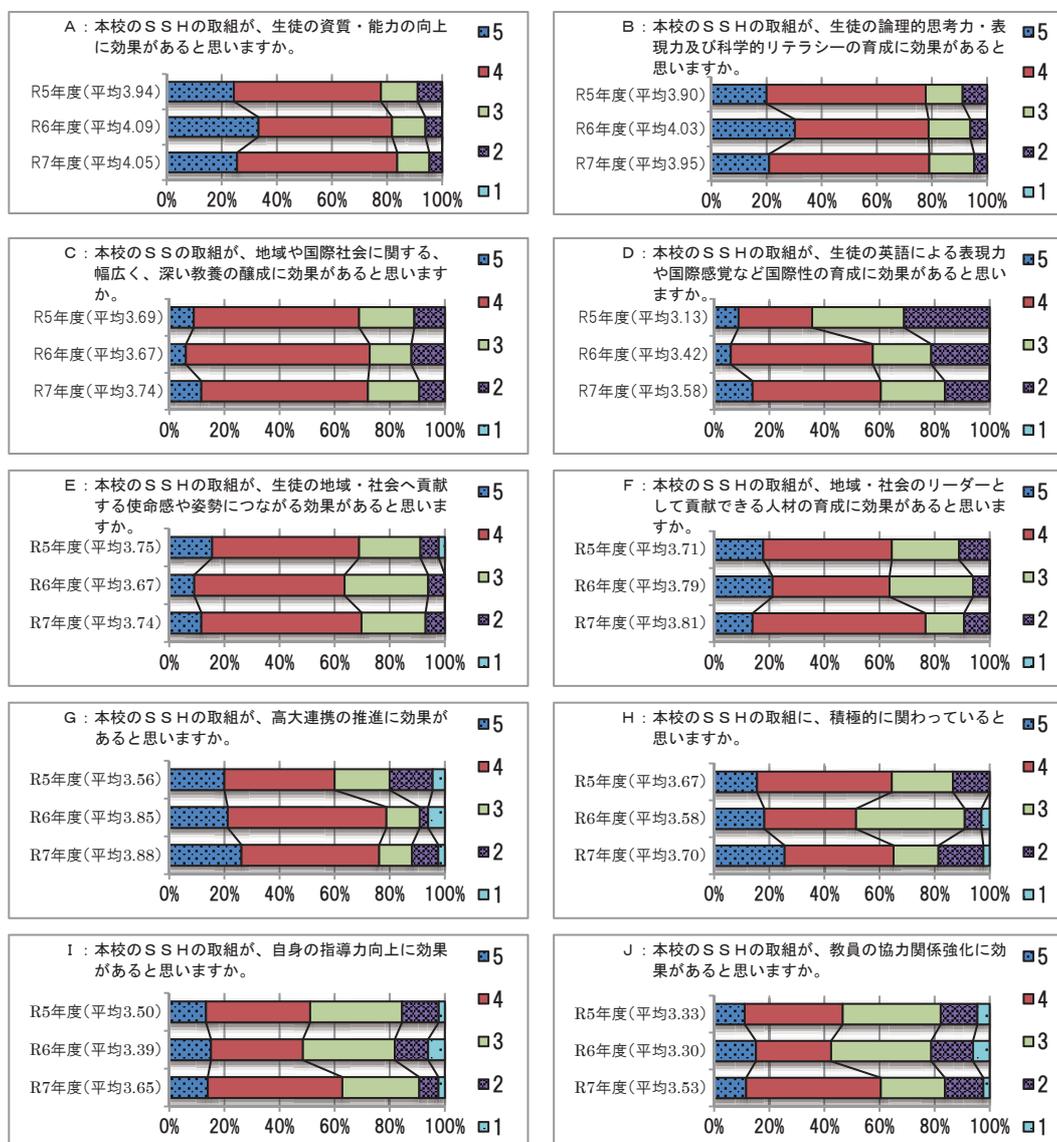


問6 本校のSSHの取組は、学校の教育活動の充実や活性化に役立つと思いますか。



③教職員

教職員（事務職員除く）のSSHに関する意識調査を、令和8年1月に実施した。結果は以下のとおりである。回答基準は（5：とてもそう思う、4：そう思う、3：どちらでもない、2：あまり思わない、1：全く思わない）の5段階とした。



## 2025年度高校魅力化評価システム診断結果

### 1. 高校魅力化評価システムの概要 令和7年7月14日～7月23日実施

「生徒の学習環境」、「生徒の成長」の見える化を支援し、授業改善、生徒との関わり方や地域との協働の在り方の検討に役立てるための「組織の現状が見える化」するための県内公立高校すべてを対象とした評価システム。

4つの資質・能力（主体性・協働性・探究性・社会性）をベースとして質問を構成し、

①学習活動 ②生徒の自己能力認識 ③生徒の行動実績

④学習環境（学びの土壌） ⑤ウェルビーイング の5つの側面についてアンケート調査を行う。

### 2. アンケート調査結果の概要

回答の割合(%)が「県内他地域より10pt以上高い」「学年間で10pt以上伸びている」項目を中心に抜粋表中「割合(%)」は各項目で「4. あてはまる」「3. どちらかといえばあてはまる」「2. どちらかといえばあてはまらない」「1. あてはまらない」のうち、4と3の肯定的な回答をした割合を示す。

#### ①生徒の学習活動

項目	全校			1年生		2年生		3年生	
	全体	昨年度との差	他地域との差	学年	他地域	学年	1年次との差	学年	2年次との差
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	割合(%)	割合(%)	差(pt)	割合(%)	差(pt)
主体性に関わる学習活動	56.70	6.40	2.10	54.40	50.20	55.20	8.40	60.40	10.00
自主的に調べものや取材を行う	82.50	6.20	8.90	82.00	69.50	81.20	8.90	84.10	7.80
協働性に関わる学習活動	83.10	3.80	2.60	82.30	79.90	81.10	4.60	85.80	4.50
活動、学習内容について大人（教員や地域の大人）と話し合う	59.20	3.70	-0.70	53.60	51.10	57.20	10.20	66.50	8.50
生徒同士で活動、学習の振り返りを行う	75.40	6.70	13.00	82.00	67.40	78.20	5.90	85.70	4.10
探究性に関わる学習活動	80.60	2.90	15.80	85.90	61.10	75.40	-5.40	80.30	2.30
自分の考えを文章や図表にまとめる	79.40	5.10	16.30	87.00	61.50	69.90	-7.80	80.90	7.80
活動、学習のまとめを発表する	77.90	3.30	14.20	80.80	57.00	74.20	-3.10	78.50	0.90
社会性に関わる学習活動	51.20	3.30	1.60	50.20	43.90	45.40	-1.90	57.40	5.30
地域の魅力や資源について考える	44.10	3.70	-11.80	43.50	53.80	35.80	-4.00	52.20	8.10
地域の課題の解決方法について考える	48.40	2.50	-3.30	43.10	43.20	42.80	2.60	58.60	2.70
日本や世界の課題の解決方法について考える	61.10	3.80	15.20	64.00	40.60	57.60	-4.50	61.40	5.10

#### ②生徒の自己認識

資質・能力	項目	全校			1年生		2年生		3年生	
		全体	昨年度との差	他地域との差	学年	他地域	学年	1年次との差	学年	2年次との差
		割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	割合(%)	割合(%)	差(pt)	割合(%)	差(pt)
主体性	現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる	87.30	7.60	12.10	87.40	73.30	85.20	4.90	89.20	11.60
探究性	勉強したものを実際に応用してみる	82.80	6.10	11.80	82.00	69.20	76.90	2.30	88.80	8.80
	複雑な問題を順序立てて考えることが得意だ	62.70	5.60	12.80	54.40	44.90	61.10	5.40	72.10	14.50
社会性	将来の国や地域の担い手として、積極的に政策決定に関わりたい	46.30	1.80	2.90	40.20	39.70	42.40	3.80	55.80	7.20
	私に関わることで、変えてほしい社会状況が少し変えられるかもしれない	63.80	7.00	10.30	57.70	49.70	61.10	8.80	72.10	13.70
	将来、見知らぬ土地でチャレンジしてみたい	77.60	0.30	5.00	77.00	71.90	78.60	-4.40	77.30	2.20

#### ③生徒の行動実績

資質・能力	項目	全校			1年生		2年生		3年生	
		全体	昨年度との差	他地域との差	学年	他地域	学年	1年次との差	学年	2年次との差
		割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	割合(%)	割合(%)	差(pt)	割合(%)	差(pt)
主体性	授業で興味・関心を持った内容について、自主的に調べ物を行った	74.50	6.70	10.50	76.20	58.20	64.20	4.70	82.50	12.70
探究性	授業の内容について、「なぜそうなるのか」と疑問を持って、自分で考えたり調べたりした	83.90	4.10	13.20	84.50	67.20	74.70	1.20	91.60	13.20
	公式やまじりを読む時、その根拠を理解するように、自分で考えたり調べたりした	80.50	3.30	13.10	78.70	66.30	74.70	3.50	87.60	8.40
学習・その他	客観的な証拠に基づき考え、判断する科学的視点から課題解決にあたることができる	62.30	5.80	12.00	56.90	49.30	59.40	3.70	70.10	11.70

④学習環境（学びの土壌）

資質・能力	項目	全校			1年生		2年生		3年生	
		全体	昨年度との差	他地域との差	学年	他地域	学年	1年次との差	学年	2年次との差
		割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	割合(%)	割合(%)	差(pt)	割合(%)	差(pt)
社会性	地域に、尊敬している・憧れている大人がいる	68.70	9.10	8.10	69.50	58.40	64.20	5.50	72.10	9.20
	地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	60.40	8.30	-7.80	56.50	60.90	58.10	7.30	66.10	12.60

⑤ウェルビーイング

資質・能力	項目	全校			1年生		2年生		3年生	
		全体	昨年度との差	他地域との差	学年	他地域	学年	1年次との差	学年	2年次との差
		割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	割合(%)	割合(%)	差(pt)	割合(%)	差(pt)
主体性	今の生活全般の満足度	78.70	3.70	4.80	78.70	74.70	76.40	2.90	80.90	6.20
	普段のあなたの幸福度	79.10	2.90	5.20	81.20	74.70	76.90	-0.40	79.30	3.80
探究性	自分の将来に向けて大切だと思うことを実行している	77.10	1.30	-1.60	74.10	75.50	72.50	1.70	84.10	8.20

3. 分析

(a) 学習活動の活性化（主体性・探究性の向上）

- 主体的な学習の定着：「自主的に調べものや取材を行う」割合は全校で 82.5% に達し、前年度比 +6.2p と大きく改善した。
- 探究プロセスの深化：「自分の考えを文章や図表にまとめる」項目は 79.4%（前年比+5.1pt）、「活動のまとめを発表する」は 77.9%（前年比+3.3pt）となり、アウトプットを伴う学びが強化されている。
- 対話の質：教員や地域の大人と話し合う生徒の割合も 59.2%（前年比+3.7pt）に向上した。

(b) 生徒の自己認識と資質・能力の変容

- 社会変革への意識（エージェンシー）：「自分が関わることで社会状況を変えられるかもしれない」と考える生徒が 63.8% となり、前年度から 7.0pt 増加した。
- 論理的思考力の向上：「複雑な問題を順序立てて考えるのが得意」という回答は 62.7%（前年比+5.6pt）となり、他地域との比較でも +12.8pt と非常に高い水準にある。
- 3年生の顕著な伸び：3年生において「現状分析能力」が 89.2%（2年次比+11.6pt）となるなど、卒業年次における資質の完成度が高まっている。

(c) 地域とのつながりと学習環境の改善

- 地域の大人のロールモデル化：「地域に尊敬・憧れている大人がいる」割合が 68.7% となり、前年度から 9.1pt 大幅に上昇した。
- 直接体験の回復：「地域の人や課題にじかに触れる機会がある」生徒は 60.4%（前年比+8.3pt）となり、地域を舞台とした学びが再び活発化している。

(d) ウェルビーイングの向上

- 生活満足度と幸福度：生活全般の満足度は 78.7%、幸福度は 79.1% と、いずれも R6 から改善し、高い水準を維持している。
- 将来への実行力：3年生の 84.1% が「将来に向けて大切だと思うことを実行している」と回答しており、進路実現に向けた前向きな姿勢がみれる。

(d)の結果より生徒はこの学校に入って良かったと他地域よりも高く評価しており、学年が進行するにしたがって評価が高くなっている。SSH プログラムなどの教育活動を通じて本校の魅力化につながっている結果だと考える。

以上のことから、本校 SSH が目指す生徒像へ向かってプログラムが実践され、それに応じて生徒も能力を伸ばしていることが分かる。地域が持っている素材や課題について研究を行う生徒には地域の関係機関に積極的に協力を仰ぐ機会を増やすなど、課題研究の質の向上につなげていくことが今後の課題である。そして教員内の理解を進め、本校の SSH プログラムが本校の魅力化につながっていることに自信を持ち、活動にあたっていきたい。

## 2 学期授業アンケートまとめ

### 1. 質問項目の分析

(1) 問1～6への生徒の回答(平均値) < 5 非常によくあてはまる → 1 当てはまらない (5段階) >

	問1※	問2※	問3※	問4※	問5※	問6※
1年生1学期	4.39	4.08	4.50	4.39	4.31	4.22
〃 2学期	4.47	4.33	4.52	4.45	4.41	4.32
2年生1学期	4.21	4.01	4.30	4.26	4.18	4.08
〃 2学期	4.31	4.11	4.36	4.30	4.27	4.17
3年生1学期	4.45	4.24	4.49	4.52	4.47	4.34
〃 2学期	4.45	4.34	4.48	4.52	4.51	4.38
全体 1学期	4.35	4.11	4.44	4.39	4.32	4.21
〃 2学期	4.42	4.27	4.46	4.43	4.40	4.29

※問1) あなたは、めあてや目標を意識して授業を受けましたか。

問2) あなたは授業の中で、他教科や社会とのつながりを意識できましたか。

問3) あなたは授業の中で、周囲の人と関わり新たな気づきを得ることができましたか。

問4) あなたは授業を通じて自分の課題を見つけ、その課題を克服しようと考えましたか。

問5) あなたは授業の中で、「なぜ?」「本当?」を考えることができましたか。

問6) あなたは授業の中で自分の考えや意見を、根拠や理由を明らかにして伝えましたか。

<分析>

- ・1学期から2学期へどの問いにおいても数値が上昇した(一部例外はあるが)。
- ・特に問2の回答では、数値の大きな伸びが見られた(←1年生の数学での伸びが大きい)。  
1学期は他の問いよりもかなりできていない印象があったが、2学期には意識できてきた。

(2) 問7・8への生徒の回答(自由記述)

問7) 自分の授業への取り組みについて気づいたことや、今後すべきだと思うことを記入してください。

【主なもの】→ <分析>

① 「根拠をもって考える」姿勢の定着

- ・「本文のどこにそう書いてあるかを探すようになった」
  - ・「なんとなくではなく、理由を説明しよう意識するようになった」
- といった記述が多く、根拠を明確にする思考習慣が育っている。

② 対話による理解の深化

- ・「自分では正しいと思っていたが、友達の見解で考えが広がった」
  - ・「説明しようとして初めて理解が浅いと気づいた」
- など、説明活動・意見交換が理解を深める契機になっている。

③ 自己課題の明確化

- ・「記述問題でうまくまとめられない」 ・「語彙が足りないと感じた」
- といった自己分析が多く、メタ認知的な振り返りが見られる。

④ 日常・社会との関連付け

- ・「食文化の話を通して、外国とのつながりを考えた」
- ・「経済の単元でニュースを見るようになった」

など、授業内容と社会・生活を結びつける意識が育っている。

⑤ 主体的な学習態度の向上

- ・「発言回数を増やそう意識した」 ・「復習を自分からするようになった」
- といった記述から、受け身から主体的学習への変化がうかがえる。

問8) この授業を受けた感想などを記入してください。

【主なもの】 → <分析>

① 思考時間の確保への評価

・「すぐ答えを言われたいのがよい」 ・「自分で考える時間がある」  
個人やグループでじっくり考える時間が多いことを肯定的に評価する声が多い。  
“待つ授業” が評価されている。

② 構造的で分かりやすい説明

・「板書が整理されている」  
・「本文に線を引きながら説明されるのが分かりやすい」  
板書の見やすさや丁寧な解説など、授業の構造の明確さが評価されている。  
視覚的整理と段階的説明が効果的である。

③ 意見共有活動の効果

・「他の人の考えを聞いて理解が深まった」 ・「少人数で話す発言しやすい」  
自分の意見をまとめた後に友達と共有する活動が、理解を深める上で効果的だったという意見が多い。  
グループ活動の安心感と学習効果が確認できる。

④ 将来との接続への評価

・「社会に出たとき役立ちそう」 ・「ニュースの見方が変わった」  
経済・歴史・食文化など、将来や社会生活に結びつく内容を学べる点を肯定的に捉えている。  
教科内容の実社会への接続が好意的に受け止められている。

⑤ さらに発展への前向き要望

・「もっと意見を言う時間がほしい」 ・「もう少しゆっくり解説してほしい」  
「このような時間をもっと増やしてほしい」といった、より深く学びたいという前向きな要望が見られる。学習意欲の高さがうかがえる要望が多い。

## 2. 授業者コメントの分析

【主なもの】

① 生徒の反応に関する課題認識

「反応が薄い」（理解していないわけではない）、「発言する生徒に限られる」ことに関する課題感が多く見られた。

② ICT・資料活用の効果

動画・スライド・Google Classroomの活用により、生徒の「理解がスムーズになった」  
「視覚的理解が進んだ」という実感を持っている。

③ 基礎力の定着への継続的取り組み

文法（含 古典文法）・発音など、「反復の必要性」「個人差への対応」が課題との意見が多い。

④ 主体性を促す授業デザイン

事前課題、発表活動、記述課題の工夫など、アウトプットを意識した授業デザインが行われている。

⑤ 学年差・授業形態による違い

講義型では理解の安定、発表型では思考の深化が見られるなど、授業形態による成果の違いが振り返られていた。

### (資料3) 運営指導委員会の記録

日時 第1回 令和7年10月2日 14:00~15:30

- ・令和7年度事業進捗状況について、中間評価のヒアリングについて

第2回 令和8年2月21日 13:00~14:40

- ・令和7年度事業報告について

場所 出雲高校大会議室

参加 SSH運営指導委員

氏名	所属・職名
赤坂 一念	島根県立大学総合政策学部 教授
浦野 健	島根大学医学部 教授
勝田 康之	株式会社出雲村田製作所管理部人事課 シニアマネージャー (第2回は代理で 人事課エキスパート 森脇 伸重 氏 出席)
陰山 洋	京都大学大学院工学研究科 教授
神田 秀幸	岡山大学医学部 教授
板倉 宏	出雲科学館 副館長
飯田 拓基	島根大学大学院総合理工学研究科 教授
花谷 浩	出雲弥生の森博物館 館長
成相 秀樹	出雲市役所総合政策部政策企画課文化国際室 室長

島根県教育庁 学校教育課 調整監 大賀 学、指導主事 野津 賢士  
本校 校長、教頭、主幹教諭、教育開発部

### 第1回議事録

#### (1) 課題

- ・データサイエンスの効果検証。2年生の課題研究の質の向上につながっているのか。
- ・事業や生徒の資質・能力の向上に関する客観的な評価方法。
- ・教員の負担感の軽減やSSH事業に対する意識の統一感の醸成。
- ・卒業生ネットワークの拡大と効果的な活用。
- ・令和6年度SSH意識調査結果よりキャリア形成との接続、国際性の意識醸成。
- ・課題研究について全国規模での受賞歴が少ない。国際共同研究への進展。
- ・本校卒業生で日本学術振興会特別研究員の追跡調査方法。

#### (2) 質疑応答 質問・助言

- ・課題研究に chat gpt 等生成AI を有効活用する。質の向上と教員の負担軽減につなげる。
- ・国際性の育成のためにALT を有効活用する。ALT が学習補助に入る等の取組事例がある。
- ・国際共同研究を高校生が実施することは困難があるが、指摘された以上なにか対策を立てなければならない。
- ・外部指導者の活用の有効性はいかほどか。より専門性の高い教員へ繋ぎ、研究の質を高める。

### 第2回議事録

#### (1) 課題

- ・課題研究における生成AI の活用について。
- ・生徒の主体的な発表会、コンテストへの参加。
- ・授業改善の取組をいかに評価していくか。

#### (2) 質疑応答 質問・助言

- ・生成AI の活用ガイドラインを高校だけで策定することは困難であり、県や大学と連携した方針策定が求められる。
- ・生徒が生成AI がもたらす誤情報を見破り、真偽を判断できるレベルまでリテラシーを引き上げる必要がある。
- ・研究テーマ「新規性」への過度な偏重がある。毎年の蓄積を批判的に検証し、深化させる「継続研究」の枠組み構築も必要である。
- ・SSH の効果を客観的に示すための「10年」といった長期的な卒業生追跡調査のデータ整備が求められる。

# (資料4)令和7年度 生徒研究テーマ一覧

【2年生 課題研究 SS探究発展AB】

■ ステージ発表班

## 1 理数科(2年1組)

- ( 数学 ) 3行×n列 chompの必勝法について
- ( 物理① ) 黒板の消しやすさと静電気の関係
- ( 物理② ) フクロウの羽の構造を利用したスクリュープロペラの研究
- ( 地学 ) 月の色の変化
- ( 化学① ) コーヒーの消臭メカニズムの研究
- ( 化学② ) アントシアニンを使った色素増感太陽電池の発電効率の変化
- ( 生物① ) 天然酵母と油の分解
- ( 生物② ) エチレンと萌芽抑制の関係

## 2 普通科(2年2～4組)

### ○数理情報学ゼミ

- ( 数2A ) PK戦の領域ごとの期待値
- ( 数3A ) ROC曲線を用いたがん検査の精度の分析
- ( 数4A ) 完全数が現れる規則性とは

### ○物質科学ゼミ

- ( 物2A ) 身近な物で殺菌効果のあるセッケンを作ろう
- ( 物2B ) サングラスが紫外線から目を守る効果
- ( 物3A ) 飛行機雲で天気予報をしよう！
- ( 物3B ) ワイヤレス送電において距離を伸ばすには？
- ( 物4A ) ペルチェ素子を利用した発電
- ( 物4B ) 不燃紙の文字を残すには？
- ( 物4C ) 出雲ドームの残響を小さくするには

### ○生命・食農ゼミ

- ( 生命2A ) トモロコシを使って雑草を生えなくするには
- ( 生命2B ) 糖の種類による発酵の違い
- ( 生命3A ) 対象魚のみ釣れる餌の開発
- ( 生命3B ) アリが避ける家庭用品とは
- ( 生命4A ) 土着菌を用いた土壤に最適なぼかし肥料の開発
- ( 生命4B ) エチレン濃度とキウイの追熟の速さとの関係

### ○生活科学ゼミ

- ( 生活2A ) 揚げ物の油脂の吸引量と酸化度の比較について
- ( 生活2B ) 野菜の鮮度を保つ方法
- ( 生活2C ) アントシアニンで目指す”黒に近い花”
- ( 生活3A ) 手に優しく殺菌効果の高いエタノール濃度は？
- ( 生活3B ) 寝る前の行動と睡眠の質の関係
- ( 生活3C ) 柿の渋抜きによるタンニン含有量の変化
- ( 生活4A ) ビタミンCをより多く残すには
- ( 生活4B ) 松の葉を用いた石けんの洗浄効果について

## 3 普通科(2年5～7組)

### ○地域共生システムゼミ

- ( 地5A ) 安全な登校路はどこ？
- ( 地5B ) 伝統的な祭りを商業化させるとどうなるか
- ( 地6A ) 出雲市内の各地域の祭りを存続していくには
- ( 地6B ) 通過型観光から脱却するためには
- ( 地7A ) 出雲市における企業誘致を成功させるには
- ( 地7B ) 出雲の商業施設に人を集める方法とは？
- ( 地7C ) 出雲の高齢者の健康寿命を延ばすのに最適な地域活動は何か

### ○環境・エネルギーゼミ

- ( 環5A ) 電気代0円生活は可能か？
- ( 環5B ) 環境に1番良いストローは何か？
- ( 環5C ) 身近なもので虫除けを作って山高生を救えるのか？
- ( 環6A ) 果物の皮を有効的に活用するには
- ( 環6B ) 砂糖を用いたブタクサ生育抑制
- ( 環6C ) 食品ロスの活用方法
- ( 環7A ) イネに被害をもたらすカメムシとの共存は可能か
- ( 環7B ) 冷房に頼らない湿度対策は可能か

### ○多文化共生システムゼミ

- ( 多5A ) なぜ郷土料理は継承されているのか
- ( 多5B ) NEXTネームはこれだ!!!～時代別日本人の名前の流行を予想しよう～
- ( 多5C ) 今の山高の制服は本当にこのままでいいのか
- ( 多5D ) 「早生まれ」と「遅生まれ」の子どものちがいをからみる対応
- ( 多6A ) ヒット曲はなぜ広く受け入れられたのか
- ( 多6B ) 言葉のジェネレーションギャップ
- ( 多6C ) 絵本におけるジェンダー表現と教訓の変化
- ( 多6D ) 日本の入試制度について～入試方法とそのサービス～
- ( 多7A ) 報道の自由度を上げるにはどうすればよいか
- ( 多7B ) ポップカルチャーで学ぶ翻訳の魅力とは
- ( 多7C ) 惚れたら負けか 貫くか～百人一首から読み解く恋愛論～

(資料5) 評価表

○研究レポート評価用ルーブリック

評価の観点	評価規準	評価項目	4(十分できている)	3(できている)	2(やや不十分である)	1(不十分である)
論理的思考力	客観的根拠や学術的理論に基づいて、論理的に思考し、自らの考えを組み立てることができる。	論理的展開	それぞれの項目・サブテーマの内容について整理され、今回の研究で論の展開および結論に一貫性があり、論理的に飛躍や矛盾がない	それぞれの項目・サブテーマの内容について関連が示され、今回の研究で明らかになったこと、不明であることが明確に示されている	それぞれの項目・サブテーマについて調べられているものの、それぞれの関連が明確に示されておらず、論理的に飛躍や矛盾が見られる	それぞれの項目・サブテーマの内容について十分調べられておらず、論理的に飛躍や矛盾が見られる
		論拠について引用と意見の区別の明示	根拠について、誰が・どのようなものでいつ述べた(わかった)ものなのかを示しており、自分たちの意見が述べられている	根拠を基に、自分たちの意見が述べられている。	自分たちの意見は述べられているが、根拠が曖昧である	自分たちの意見が述べられていない
		多角的・多面的思考(研究の内容・研究結果の考察)	文献や独自調査を基に、分析の内容に多角的な視点を取り入れ、反対意見を予想し、それに対する意見が述べられている	文献や独自調査を基に、分析の内容に多角的な視点を取り入れ、メリットやデメリットが示されている	分析の内容に多角的な視点を取り入れているが、分析が一面的である	分析の内容に多角的な視点を取り入れていない
問題解決能力	客観的事実に基づいて現状の課題を発見・分析し、その解決に向けた自らの考えを構築することができる。	テーマ設定(研究テーマ)	自分たちの興味・関心を前提に、問題の焦点が絞られており、科学的・社会的に意義のあるものになっている	自分たちの興味・関心と科学的問題・社会的問題との関連性が見られる	自分たちの興味・関心を前提にしているが、何を明らかにしたいのかが明確に示されていない	研究を通じて、何を明らかにしたいのかが明確に示されていない
		課題点の明示・発見・分析(研究の背景～研究のまとめ)	現状の課題・問題が発見できており、これまでにない問題点や複数の要素が明らかにされている	現状の課題・問題が発見できており、その原因が分析できている	現状の課題・問題が発見できているが、その原因の分析がやや不十分である	現状の課題・問題が発見できていない
		解決策・提言の明示(研究のまとめ)	課題・問題の解決に向けた自分たちの解決策・提言・考えが示されており、自分たちで可能なものとして示されている	課題・問題の解決に向けた自分たちの解決策・提言・考えが示されている	課題・問題の解決に向けての考えがやや不十分である	課題・問題の解決策・提言・考え等が全く示されていない
情報活用能力	情報についての基本的な知識・モラルのもとに、その収集方法を身に付け、集めた情報を整理・分析し、活用することができる。	情報源の明示・信頼性・多様性(参考文献)	文献・情報・データの出典(著者・製作者、書名・HP名、出版社、出版年・制作年、URL等)が参考文献一覧に正しく明示されており、信頼のおける情報を多様に入手している。	文献・情報・データの出典(著者・製作者、書名・HP名、出版社、出版年・制作年、URL等)が参考文献一覧に正しく明示されており、信頼性がある	文献・情報・データの出典(著者・製作者、書名・HP名、出版社、出版年・制作年、URL等)が参考文献一覧の明示がやや不十分であり、信頼性に欠ける	文献・情報・データの出典(著者・製作者、書名・HP名、出版社、出版年・制作年、URL等)が参考文献一覧に正しく明示されていない
		情報の整理・分析・活用	適切な文献・情報・データを用いて、それぞれ分かりやすく整理・分析し、それを適切に活用しながら論理を展開している。	様々な情報源の個々の情報を整理・分析し、それを活用しながら論理を展開している。	収集した情報の整理や分析がやや不十分であり、それを活用した論理展開も不十分である。	情報の整理がなされていない

○研究発表評価用ルーブリック

評価の観点	評価規準	評価項目	4(十分できている)	3(できている)	2(やや不十分である)	1(不十分である)
プレゼンテーション能力	学習や研究の成果を文章やスライドに分かりやすくまとめ、その内容を的確に説明することができる	研究成果を適切にまとめているか	研究成果について分かりやすく整理してまとめられている	研究成果について整理してまとめられている	研究成果の整理がやや不十分である	研究成果の整理が十分になされていない
		スライドを分かりやすく作成しているか	スライドが誰にでも見やすく、見る人の理解を促進する表現で作成されている	スライドが見やすく、分かりやすい表現で作成されている	スライドがやや見にくく、やや分かりにくい	スライドが見にくく、分かりにくい
		発表内容を分かりやすく的確に説明しているか	発表内容について誰にでも分かりやすく整理され、聞く人の理解を促進する表現で説明している	発表内容について整理され、的確な表現で説明している	発表内容についての整理がやや不十分で、説明がやや分かりにくい	発表内容についての整理がなされておらず、説明が分かりにくい

(資料6) 用語解説

○デザインズム

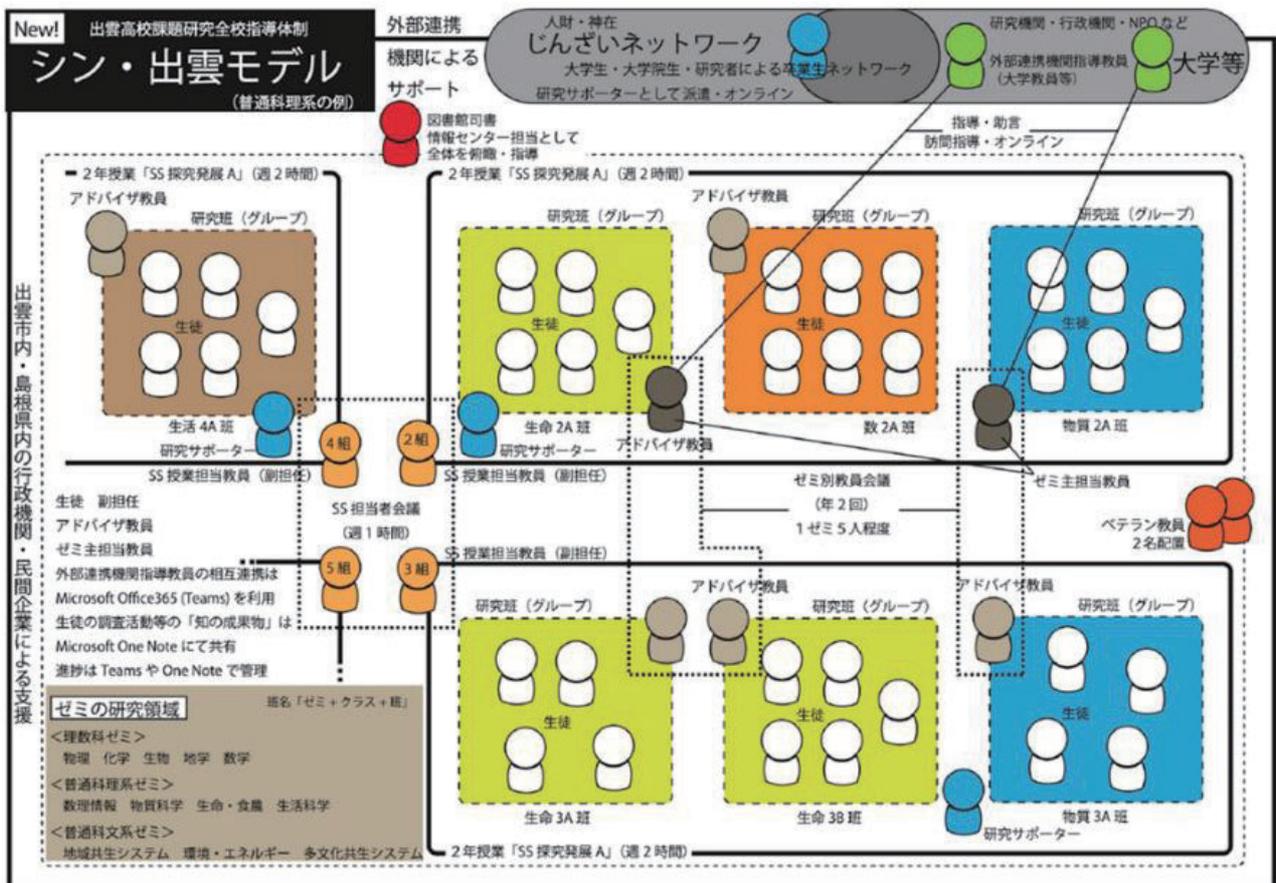
デザイン思考を組み込んだ課題研究を中核として、科学を活用して日常生活に潜在化する課題を解決しようとするイノベーション人材を育てる新しいプログラム全体を、元になった「デザイン思考 (design thinking)」と「出雲 (Izumo)」と結びつけて「デザインズム (Designizm)」と命名した。具体的な課題研究の流れは以下の通りであり、これを繰り返す学びのサイクルを生み出す。第Ⅲ期では新たな視点を加え、情報活用力・課題発見力育成を特に強化した「シン・デザインズム」を開発し、授業改善による教科学習との好循環による深化を図っている。



<一般的な「デザイン思考」と出雲高校課題研究プログラム「デザインズム」との対比>

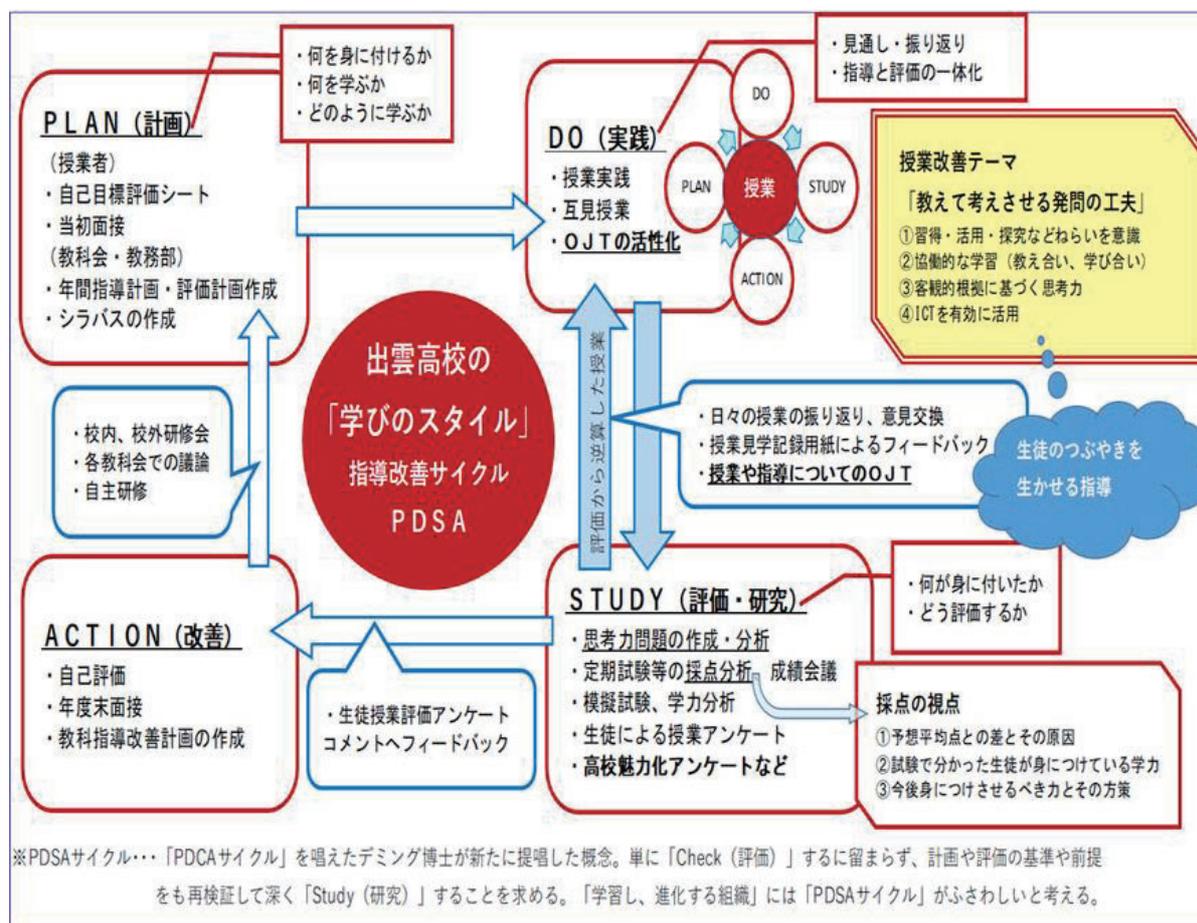
商品開発等で用いられる一般的なデザイン思考のプロセス	デザイン思考を取り入れた出雲高校課題研究プログラム「デザインズム」
① <b>共感</b> 問題を見つけるための情報を集める	① <b>観察</b> 身の回りに存在する様々な課題に着目
② <b>定義</b> 解くべき問題を決定、一つに絞る	② <b>情報共有・課題選定</b> その課題の現状や背景を調査し、課題を設定する
③ <b>アイデア</b> アイデアを出し解決方法を探す	③ <b>洞察・共感</b> さらに課題について調べながら自分ごととして捉える。
④ <b>プロトタイプ</b> アイデアを検証できる試作品を作る	④ <b>研究課題決定・検証計画策定</b> 科学的手法を用い、自分たちで考えた解決方法を考え試す
⑤ <b>テスト</b> テストを通じて評価する	⑤ <b>研究活動</b> 検証の結果を考察して評価し、新たな課題を発見、調査する

○シン・出雲モデル



校内アドバイザー教員【茶色】	週2時間のSS探究発展の授業では、理数科・普通科ともに4～5名で構成される研究班に1名の教員（以下アドバイザー教員）が配置され指導にあたる。理数科は数学・理科の教員が、普通科では全教科の教員が分担してアドバイザー教員となり、1～2班を担当する。
課題研究のベテラン教員（非常勤）【濃オレンジ色】	文系分野と理系分野それぞれ1名ずつ配置されており、アドバイザー教員をサポートしながら指導にあたる。
SS授業担当教員（各クラスの副担任）【オレンジ色】	SS探究発展の授業では副担任が主としてクラス全体を指導し、各班のアドバイザー教員と協力しながら、取組状況を把握する。SS授業担当は教育開発部と毎週1回「SS担当者会議」を行い、課題研究の指導について共通理解を図りながら、改善を行っている。
外部指導教員【緑色】	大学、行政、NPO等に外部指導教員をお願いして各ゼミに配置している。ゼミ別の集会や発表会では来校のうえ、指導や評価をしていただいている。また、研究過程ではアドバイザー教員から外部指導教員に取組状況を連絡したり、研究へのアドバイスを依頼したりしている。
研究サポーター【水色】（準備）	卒業生会と協力して卒業生ネットワークである「久徴会人財バンク」（補足資料 用語集）を構築した。生徒と教員の間に入って課題研究のメンターとしての働きをする大学生の配置について準備を進めている

○出雲高校「学びのスタイル」



令和5年度指定スーパーサイエンスハイスクール  
研究開発実施報告書・第3年次

発行 令和8年3月  
発行者 島根県立出雲高等学校  
校長 小林 努

住所 〒693-0001  
島根県出雲市今市町 1800 番地

電話 (0853)21-0008

FAX (0853)22-7855



